死神　対　バンパイア

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神　対　バンパイア

【Ｎコード】
Ｎ２６２６Ｅ

【作者名】
切香

【あらすじ】
有名な「ドラキュラ屋敷」に侵入した夏梨・遊子・ウルルが目撃したのは、眠り続ける美しい姫君だった。その場に駆けつける一護・ルキア・日番谷の３名だが、その強大な霊圧に歯が立たない。数多くの死神を巻き込んだ「バンパイア騒動」を描くホラー・・・の名を借りたコメディ。

Ｇｏｎｇ１　日番谷冬獅郎の憤慨

五月五日、こどもの日。
日番谷冬獅郎は憤慨していた。

チュンチュン……
柔らかな五月の陽光の中、雀が小さな庭を横切ってゆく。
縁側では、座布団の上で黒猫が一匹、ふわ、と小さくアクビをしている。
その金色の目を細めて、頭を腕で抱きこむようにして眠りに戻ろうとしたが……
ちら、と不機嫌そうな目を、部屋の中へと向けた。そして、ぽつりとつぶやいた。
「何やっとんじゃ、アイツらは……」

光の差し込む、８畳ほどの和室の中央には、ちゃぶ台が置かれている。
そして床の間の方向には、テレビがひとつ。
バイオレンスなＢＧＭが流れる中、隣同士に座る２人の少年は、無言でゲームのコントローラーを握っている。
タタタ……とボタンを連打する音しか、２人の少年は発していない。
黒猫……夜一は、座布団の上から、テレビの画面にうつった、ナレーションを一瞥する。
――　ＨＩＴ！　ＨＩＴ！　じんたさま　は痛恨の一撃を受けた！
――　重ねてそこにラリアーット！決まったぁ！

――　残虐非道！更にその上に卍固め！鬼、鬼の仕業です！！

「て……」

奥の方に座った、たまねぎのような髪型に、真っ赤な髪の少年・ジン太が、初めに発した言葉は「て」だった。

プルプル、と震える手が、つかんでいたコントローラーをバン！と畳に投げつける。

「てんめぇ、冬獅郎！もう我慢できねー！！直接殴ってやる！」

手を止めた銀髪の少年に向かって、有無を言わさず殴りかかる。

律儀にコントローラーを畳に置いた少年……日番谷冬獅郎は、胡坐をかいた体勢のまま、今まさに自分の頭に拳骨を見舞おうとしているジン太を見上げた。

がんっ！！

一秒後、部屋に鈍い音が響き渡る。

座ったまま放った冬獅郎のラリアットが、ジン太の額に決まっていた。

「……！！」

「卍固めもいっとくか？」

額を両手で押さえ、畳に無言で転がったジン太に、立ち上がった冬獅郎が声をかける。

「あ……あんた鬼や……」

「鬼で結構！」

「くっそー。もう1ラウンド！」

そういってジン太が起き直り、涙目でコントローラーを握ったとき。

ぶつん！！

音を立てて、画面が真っ暗になった。
「あああー！！データが！データが！」
「全くお前ら、格闘ゲームは禁止じゃ！うるさすぎて昼寝もできぬ」
コンセントのコードを口にくわえた夜一が、ぽい、とコードを畳に落とした。

「……お前はいっつも寝てるじゃねえか」
胡坐をかいたままの冬獅郎が、後ろのちゃぶ台のヘリにもたれかかりながら、夜一を見た。
無表情に見えるが、割とキレてることが慣れれば分かる。
「儂は猫だから良いんじゃ。お主死神じゃろ？泣く子も黙る死神が、こんなトコで何をしとるんじゃ」
「……泣く子も黙る、か」
どうやら、変なところで怒りのポイントに触れてしまったらしい。
コントローラーをちゃぶ台の上に置いた冬獅郎は、ギラリと無意味に夜一を睨んだ。

「なんじゃ？機嫌悪いのぅ。八つ当たりはよせ」
「八つ当たりなんてしてねー」
「だったら睨むな」
「睨んでねー」
ラチがあかん。夜一はため息をついた。
瀞霊廷ではエリート死神かもしれんが、ここじゃただの駄々っ子にすぎんのは、気のせいか？
菓子でも食わしてみるか。
「おーい。テッサイ！こっちになんか食い物寄せてくれ！」
夜一は、廊下に向かって叫んだ。

菓子で死神を懐柔するんじゃねー、と不機嫌だった冬獅郎は、じゃがりこが案外旨いことを発見して、やがて静かになった。
「で、どーしたんじゃ」
百年前に追放されたといっても、元護廷十三隊の隊長でもあった夜一にとって、日番谷は後輩にあたる。
何か悩みがあるなら聞いてやろうとするのは、その辺の意識が働いている。

「瀞霊廷こども通信って知ってるか？」
しかし日番谷が切り出した言葉は、さすがの夜一も、予想だにしないものだった。
「子供むけの、瀞霊廷通信みたいなもんじゃろ？」
それがどーしたんじゃ、と急に夜一は弛緩する。
これじゃ、特に深刻そうな話は、出て来ようがなさそうじゃ。

「こどもの日特集、とやらで、ガキどもと同年齢の死神……
俺と草鹿しかいねーんだが、インタビュー受けさせられたんだ」
「珍しくもないじゃろ。隊長なら。何が問題なんじゃ？」
さらに夜一は弛緩する。ついでにひとつ、大あくびをした。
夜一の疑問をよそに、日番谷はハァ、とため息をついた。

「なんじゃ、そのジジくさいため息は？」
「うるせぇ。インタビューの最後で写真を撮ったんだが、その時に言われたんだ。
『子供らしい無邪気な笑顔でお願いします』」
「ぷっ……ぎゃはははは！！」
日番谷が言い終わる前に、ジン太が笑い出す。
無邪気に笑う日番谷なんて、テッサイが性転換するくらい想像でき

ない。

「どーせ、リテイク十回、とかやったんだろ！！」
笑え、といわれても口を痙攣させるくらいが関の山の日番谷。
それを見て引きつるカメラマン、流れる気まずい空気。
そして、爆笑する草鹿やちる。
まるで見てきたかのように、その風景を思い浮かべるのはたやすい。

日番谷は、大口を開けて笑い続けるジン太の口の中に、じゃがりこを放り込んだ。
「うっ！」
じゃがりこの先が喉仏を直撃し、ジン太はうめいて黙った。

「……リテイク十回でも、撮れなかったんじゃなかろうな」
「とにかくだ」
日番谷は、バン、と湯のみでちゃぶ台を叩いた。
きっと、撮れてない。それを見たジン太と夜一は確信した。

「死神ってのは怖くて当たり前だ。笑顔でサービスしてどうすんだ」
なるほど。不機嫌の原因はそれか。
死神というのは、死者の魂をあの世に引き連れてゆくのが仕事だ。
自縛霊や、虚……いわゆる悪霊の類に対しては、力で制圧する戦闘集団でもある。
つまり、人間から見れば、超越者であると共に、恐ろしい存在だ。
……その、はずだ。

ただ、百年ぶりに夜一が接するようになったソウル・ソサエティは、サバけているというか何なのか、おどろおどろしい空気は半減している気がする。
悪く言えば、威厳がない。

――　明るく楽しく、親しみやすい皆の死神なぁ……
確かに、あまりそういったものは求められていない気がする。
「……」
夜一は、ちゃぶ台の前に座って、しみチョコをほおばっている日番谷をしみじみと眺めた。
「確かに」
威厳がない。
そこまでは言わなかったが、たぶん分かったのだろう、仏頂面の日番谷が茶をぐい、と飲んだ。

「むしろ今怖がられてるのは、死神というよりも死者そのものかも知れんの」
「ん？」
その言葉に、日番谷が夜一を見下ろした。
「何かあるみてえな口ぶりだな」
「バンパイアじゃよ」
悪戯っぽい金色の目を、夜一が日番谷に向けた。

「バンパイア……吸血鬼か。見たことねえな」
「まぁ、国産のは滅多に例がないからの」
「な、なぁ」
当たり前のように話す日番谷と夜一の会話に、ジン太が割ってはいった。
「バンパイアも、ソウル・ソサエティにつれてくのか？」
「ああ」
日番谷はあっさり頷いた。

「ただ、虚(ホロウ)は体から離れた魂そのものだが、バンパイアは死んだ体に魂が取り憑いてる状態だ。
魂をまず、体から引き離さなきゃなんねー分面倒くせぇらしい。
まぁ、俺はバンパイアを魂葬した経験はねーけど」
「まぁ、言うても生身の人間じゃ。
虚に比べれば力は弱いし、新人の死神でも十分処理できる程度のもんじゃ」

ふーん。
うんうん、と頷きながら二人の会話を聞いていたジン太が、急にバン！とちゃぶ台を叩いて起き上がった。
「じゃなくて！バンパイアなんて、ホントにいるのかよ？」
「なんじゃ、ジン太」
夜一が、からかうような口調でジン太を見上げた。
「心配になったか？あやつらが。なら、一緒に行けばよかったものを」
「……何の話だ？」
日番谷が、目を丸くして夜一とジン太を見比べた。

Ｇｏｎｇ２　三人娘の挑戦（前編）

「なぁ、こっちでいいのかな、ホントに」
「心配症だなー、遊子。地図の通り来てんだ、間違いねえって」
知らない町の、普通の住宅街に足を踏み入れることなんて、めったにない。
夏梨、遊子、ウルルの３人は、興味深げにあちこちを見回しながら、野立町……空座町の隣町に、足を踏み入れていた。

「しっかし、なんだか暑すぎねえか？まだ五月なのに」
夏梨は、じりじりと照りつける太陽を見上げ、目の前に腕をかざした。
はっきりしない春の空は、どことなく白っぽい。
じっくりと下から煮られてでもいるみたいに、湿気を含んだ蒸し暑さが周囲を覆っていた。
動かなければ平気だが、歩き出せばじっとりと体に汗がにじんでいる……そんなイヤな天気だった。

「なんか、段々蒸し暑くなってくるみたい……」
ウルルが、ぱたぱたと顔を仰ぎながら言った。その顔に、うっすらと影がさす。
「もしかしたら……『バンパイア屋敷』のせいだったりして……」
「怖い！ウルルちゃん、その顔が怖いよ！！」
「何が怖いんだよ、何が！そんなもん居ねぇし。居たとしたって、元は普通の人間なんだぜ？」
夏梨は、顔を見合わせた２人を振り返ってそう言い放つと、ずかずかと歩き出した。
自慢じゃないが、幽霊を見るのなんて日常だ。幽霊を見ない日なん

てないって言っていいくらいだ。
その上で言わせてもらうと、幽霊なんて言ったところで、所詮は人間の延長だってこと。
幽霊が幽霊を口説いてたり、セクハラしてたり、そうかと思ったら千鳥足で歩いてたり。
幽霊になろうが、人間のやることはタカが知れてるんだと、あたしは思う。

「ねぇウルルちゃん、ジン太くんは？」
「なんか、用事があるから来れないって」
「ふーん？変ねえ、今日はヒマだって言ってたのに」
そりゃー、用事も出来るだろうさ。
花刈ジン太が、こと臆病者だっていうことは、このあたしがよーく知ってる。

「怖いけど、楽しみだねー♪バンパイア屋敷探検なんて、テーマパークみたい！」
遊子。こいつが怖がりに見せかけて、どれほど図太いかってことも、あたしはよーく知ってる。

「ん？」
地図に目を落として、あたしはふと立ち止まる。
「この辺だぞ、地図じゃ……」
見上げてみて……あたしたちは同時に、声を上げていた。

それは、あまりに何かが出そうな、お化け屋敷よりもお化け屋敷のような洋館だった。

ぎぃ……ぎぃ。
切妻（きりづま）の屋根の天辺には、さび付いた風見鶏がつけられ、嫌な音を立てている。
元はキレイな青色に塗られていたのだろう屋根も、さび付いて色あせている。
その白い壁は、もう灰色に変色して、あちこちにヒビがはいっている。

窓ガラスは割れ、中で黄色く日焼けしたカーテンがゆれている。
その先は、夜みたいに真っ暗だった。

……たぶん、戦前くらいまでは、それはそれは荘厳な建物だったのかもしれない。
週末には、貴族の人々が集まって舞踏会くらいは開かれていたのかもしれない。
ただ、平成の今においては……家の持ち主と連絡が取れず、取り壊せずにいる、荒れ果てた洋館にすぎなかった。

「う、わ……」
思わず声を漏らしながら、夏梨はさび付いた門に手を置いた。
鍵がかかってることくらいは想像していたが、門はギシギシ音と立てながらも、あっさりと開いた。
「広いお庭……だけど」
こっそり体を滑り込ませた遊子が、庭を見て眉をひそめた。

ドライフラワーのように立ち枯れした薔薇。
春の最中だというのに、葉が一枚もついていない木々。
そこに濃厚に漂っているのは、死のにおい。
生きているものがこの広大な敷地内にいるとは、思えないほどに。

「こりゃ、噂が立つのも当たり前だな……」
窓際に女の人が座っているとか。
遊びにはいった小学生が出てこなかったとか。
家の中には、巨大な棺がいくつも置かれていたとか。
そんな、漫画とかドラマそのものみたいな噂が、まことしやかに流れている。
たしかに、そんな想像が髣髴（ほうふつ）とするみたいに、この建物は……出来すぎてる。

「……夏梨ちゃんっ！」
その時、がしっ、と肩をつかまれ、夏梨は不本意ながら、その場から飛び上がりそうになった。
「なんだよウルル、急に……」
「あ……あれ」
「ん？」
ちょっとやそっとじゃ感情を動かさないウルルの表情が、唖然としてるのが分かった。
ウルルが指差している、二階の窓の部分に、夏梨と遊子は目をやった。

「なんだよ、ただ、カーテンがゆれてるだけ……っ！？」
カーテンがたなびき、真っ暗に見える中に、ちらり、と光が差し込む。
一瞬、カーテンの裏側に、黒髪が、たなびいた気がした。
視線が動かせない。凝視していると……強い風が一陣、吹き抜けた。
あらわになったのは……白っぽいドレスのようなものに身を包んだ、窓に背を向けた人影。

黒髪が風にあおられ、白いうなじが見えた。
そして、わずかにその口元が……微笑んだ、その唇が見えた気がした。
「きゃぁぁっ！」
遊子が後ろから夏梨とウルルにしがみついた。
「わぁぅっ！」
思わず声を上げて振り返り、もう一度窓に目をやったときには……
その姿はもう、どこにもなかった。

「ど……どうする？夏梨ちゃん、ウルルちゃん……」
遊子の声が、はっきりと分かるくらい、震えている。
気のせい、といってしまうには、あの女の人は、はっきり見えすぎた……
「ここで引き返したらジン太が笑う」
夏梨は、ぎゅっと拳を引き結んだ。
幽霊なんてカケラも怖くねー、なんていつも言ってる以上、逃げることなんて出来ない。

「遊子、怖かったら先に帰ってろ」
そのまま、振り返らずに、洋館の入り口へと向かった。
「え……ちょっと、おいてかないで、夏梨ちゃん！」
遊子があわてて夏梨を追い、その後にウルルが続いた。

Ｇｏｎｇ3　朽木ルキアの憂鬱

「あ“あ”あ“……」
空座高校の、1年のクラスルーム。
時刻は午後6時近く。窓からの風に揺れるカーテンも、茜色に染まり始めている。

後ろから4番目の窓際の席で、たった一人黒髪の少女が机に向かっていた。
さわやかな夕焼けに似合わない、じめじめした苦悶の声が教室に響いた。

「さっっぱり……分からぬ」
机に広げた教科書に並んでいるのは、シグマだのアルファだの、読むことも難しい記号の数々。
――　大体……！
ルキアは、ぐっ、と拳を握り締める。
瀞霊廷に戻っていたほぼ2ヶ月というもの、勉強など全くしていない。
その間に進んだ授業の差を、取り戻すのがどれほど難しいか。
それを、ルキアは放課後の教室で思い知っていた。

前半は死刑囚として幽閉され、後半は療養していたのだから、ルキアに非はない。
非はないのだが……それを先生に堂々と告げるというわけにもいかない。
結果として、この問題を解いて、職員室の先生に提出するまで、ルキアは帰れないのだ。
誰かに聞こうにも、教室に誰もいないのでは、どうしようもない。

――「朽木さん。わたし勉強つきあおっか？数学は苦手だケド……」
躊躇(ためら)いがちに切り出した織姫の申し出を断ったのが、とことん悔やまれた。
はぁ、とため息をついた、その時。ガラリ、と音がしてドアが開いた。

「ルキア。おめー、まだ残ってんのか？」
ひょい、と教室を覗き込んだのは、見慣れたオレンジ頭だった。
手には、スターバックスの紙のコーヒーカップをふたつ、持っている。
「一護……一護――！！」
「うおっ？？」
目をウルウルさせて飛びついてきたルキアを受け止め、一護は目を白黒させた。

「……だから。ここがこーなるだろ」
「ふむふむ……で？」
他に誰もいない教室で、ふたりの声だけが響く。
一護は、ルキアの前席の椅子に横向きに腰掛け、足を組んでいる。
ルキアの席に片肘を付き、問題集を覗き込んでいた。

「で？じゃねえ。続きは自分で考えろ」
「～～、良いだろうもうちょっと教えてくれても！」
顔を上げたルキアが、すがるような目を向けるが、一護は首を振る。
「見ててやるから」
ずっ、とコーヒーをすすり、一護は眉間にシワをよせたルキアを見

下ろした。
決して、面倒くさいから教えないわけじゃない。
逆に、全部教えてしまったほうが楽なのに、それをしないのは、ルキアのことを考えてだろう。
それが分かっているから、無理に教えろといえない。
――　死神に因数分解など不要だ！アタマの固い奴め……
そう思うものの、目下の状況のルキアには、必要なのは確かだ。
コン、コン、とルキアがシャーペンの芯で机を打つ音が響いた。
「こうやって……こう。……あれ？」
サラサラと、とは言いがたいが、シャーペンが紙をすべる。
「ん？」
一護が横から、答案用紙を見下ろした。
「……なんだ、答え出てんじゃねーか」
「へ？」
「これ答え。合ってるぜ」
「……」
「ルキア？」
「っっっ、しゃぁ！！」
貴族の令嬢とはとても思えない声をあげて、ルキアは唐突に立ち上がった。
のけぞった一護をよそに、ぐっ、と拳を握り締めている。
「帰れる！これで帰れる！あの薄汚い押入れの中に！」
「薄汚ねーとか言うな！俺の部屋だぞ」
コン、とルキアの頭に軽く拳をあて、一護は立ち上がった。

ルキアの分もコーヒーカップを持ってゴミ箱に向かう背中に、ルキアは目を奪われる。
そういえば。
手伝おうか、という織姫の申し出を断ったとき、一護の視線を感じた。
あの一瞬から、こうなることを見越して、コーヒーを2人分、買って戻ってきてくれたのか。

無愛想で、無鉄砲で、無粋なやつ。無い無い尽くしだと思っていたけれど。
同じやさしさで、この男は私を救うため、瀞霊廷の死神全員を敵に回して戦ったのだ。
ぶっきら棒なくせに、傍にいると、湯のように自分を包む男。
そのぬくもりを感じるのは、むしろこういう、何気ない瞬間。
ルキアはその時、一護に心から感謝した。

「一……」
声をかけようとした時。
「ホ“ロ”ーウ“！！ホ“ロ”ーウ“！！！」
突然一護から鳴り響いた大音響に、
「おおぅ！！」
一護とルキアは同時に飛び上がった。

「なんだぁ？虚か？」
「見てみる」
ルキアは懐から伝令神機を取り出し、鳴り続けているその音を切った。
「場所は隣町だが……この気配……虚、なのか？」
ルキアは、夕焼けの迫る窓の外に目をやり、怪訝そうに眉根を寄せ

た。
普段接している虚とは、どこがどう、といっていいかわからないが、違う気がした。

なんだか、生ぬるい空気が自分を包むような……
伝令神機の画面を、後ろから一護も覗き込む。
「小さいな……ん？」
「なんだこりゃ」
２人で、ほぼ同時に声を発する。
画面上に浮かんでいた小さな、小さな点が、たった数秒のうちに、恐ろしく大きくなったからだ。
そのときには、もはや伝令神機の画面を見るまでもない。
おどろおどろしい気配が、肌があわ立つほどにはっきりと感じられた。

「一護！」
ルキアがソウル・キャンディを口に放り込み、死神化した。
漆黒の死覇装が風にはためく。
「おう！」
死神許可証を額にあて、一護が死神化する。
「コン！先に家に帰ってろ！」
むっくりと体を起こした、コン入りの自分に一護は声をかける。
「お・・おい一護！」
あわてて立ち上がったコンをよそに、一護とルキアは同時に教室の窓を蹴り、外へと飛び出した。

Ｇｏｎｇ４　三人娘の挑戦（中編）

それよりも、１５分ほど前。
ぎい……ときしむ玄関の扉を、夏梨は体を強張らせながら、ゆっくりと開けた。

「……広いね。意外と明るいよ」
夏梨の肩越しに中を覗いたウルルが、少しほっとしたように言った。
そこは、天井から吹き抜けになったロビーのような部屋だった。
大きな天窓から、夕焼けの光が差し込み、無人のロビーは明るかった。
最も、ロビーの中は、それこそ何年も人が足を踏み入れていないのは明白だ。
蜘蛛の巣がいくつも天井から垂れ下がり、中央には巨大な女郎蜘蛛が居座っている。

打ち捨てられたようなテーブルには、うずたかく埃が積もっている。
天窓も汚れ果てているせいで、全体に差し込む夕日の光も、縞（しま）のように見えた。

「……でもきっとここ、昔はすごくキレイだったんだろうね……」
遊子が、夏梨の肩を後ろからつかみながら言った。
その遊子の熱をはっきり感じるほど、建物の中は蒸し暑かった。
夏梨の視線は、ロビーの奥の重厚なドアに向けられる。

――　もうちょっとだけ。
深入りしちゃいけない。そう思いながらも、なぜかその扉から目が離れない。

引き寄せられるように、夏梨はドアに向かって足を踏み出した。

「本当に、広いね……この建物」

何部屋通り過ぎただろう。

常に前の扉のみを開けるようにしていたから、そのまま後ろへ戻れば、迷わずロビーに戻れるはずではあった。

でも、同じような部屋ばかり通り過ぎていると、実は同じ部屋じゃないか、という錯覚にとらわれそうになる。

異変に気づいたのは、そのときだった。

「なぁ。なんか、どんどん部屋キレイになってないか？」

夏梨は、後ろの2人を振り返った。

「え？」

「……本当だね」

遊子とウルルが、部屋を見回した。

燈(あかり)もないその部屋は、日の光が差し込んでいるとは言っても、少しずつ薄暗くなってきている。

朧(おぼろ)な光に映し出されたその部屋は……まるで、新品のように見えた。

やわらかなビロードが張られたソファー。

埃ひとつないテーブルは艶々と光り、その上には書きかけの手紙がおかれている。

傍には、美しい孔雀の羽をつかった羽ペンと、インク壺があった。

「……キレイな羽」

手を伸ばした遊子が、そっ、とその羽ペンを持ち上げる。

何とはなしに紙にペンを走らせて……

「きゃっ！」

短い悲鳴をあげて後ろに跳びすざった。

手から離れた羽ペンが、床に転がる。

「遊子！どうした……」

歩み寄った夏梨とウルルは、紙を見下ろして、言葉を失って立ちすくんだ。

まるで、さっきインクにペン先を浸したかのように……

滑らかな筆跡が、紙に残っていた。

「ね、ねぇ、出ようよ。この建物、やっぱりおかしいよ」

震える遊子の声に、確かにこれ以上立ち入ったらいけない、と夏梨も直感した。

「……そうだな」

出よう。

そう言おうとした時だった。

「！」

夏梨は、急に動きを止めた。

「何？どうしたの？夏梨ちゃ……」

「シッ！今、何かの声が……！」

ぎょっ、と遊子とウルルが目を見交わすのが見えた。

「何の声もしないよ、夏梨ちゃん」

その不安をあらわにした遊子の言葉は、夏梨には届かない。

確かに今、声がした。

そう夏梨が思ったとき。

――　誰か……。

「……聞こえた」

夏梨は、耳に添えていた手を外した。

鈴を振るような、澄んだ高い少女の声。

ヒトの声にしては、余りにキレイに聞こえる。

怖さを越えて、耳にした者を惹きつけてしまうような。

「か！夏梨ちゃん、これ以上はダメだよ！！」
遊子が肩を掴んで引き止めるが、夏梨は無意識のうちに、その手を振り払っていた。
「夏梨ちゃん！」
その視線の先は、目の前のドアに向けられている。

――　誰なんだ。
夏梨は、抗えないその力に導かれるように、取っ手に手をかける。
そして、きしむドアを開けた。
夏梨の後ろで、ハッ、と息を飲み込んだ二人の声が、聞こえた。
３人とも、そこに広がった景色に……恐怖さえ、脳裏から滑り落ちるのを感じていた。

その部屋は、教会に似ていた。
ロビーと同じような吹き抜けで、天窓は巨大なステンドグラスになっている。
そこから、燃えつきかけたような夕焼けの光が、ゆるゆると部屋に差し込んでいた。

そして、ロビーとの大きな違いは……その部屋が、昨日建てられたかのように、全く朽ちていないこと。
ステンドグラスと反対の壁際には、巨大なパイプオルガン。
婚姻の宣誓をするときのような、小さな舞台、教壇。
長机があわせて１０ほど、規則正しく並べられていた。
ただ、３人の目を引いたのは、そんな光景ではない。

その舞台の前に、まるで引き立てられるように。
淡いピンク色の大理石で作られた、豪奢なつくりの棺が置かれていた。
台場を入れれば、棺の高さは、ちょうど夏梨たちの身長くらいはあった。
そして、その棺の、上空５０センチくらいの「空中」に。
その少女は横たわり、眠るように瞳を閉じていた。

ため息が出るほどに精緻（せいち）な刺繍がほどこされた、ウェディングドレスに似た純白のドレス。
その腕には、同じく真珠色の手袋がはめられている。
華奢（きゃしゃ）な指は胸の前でゆるく組み合わせられ、長いドレスの裾から見える足は、裸足だった。
亜麻色（あまいろ）の髪は、おそらく少女の身長くらいはあるのではないだろうか。
見事な波打つ髪の流れが、少女の体を護るように、ふわりとその場に浮きたなびいている。

かつ、かつ、と音を立てて、３人は棺に近寄った。
近寄るにつれて、怖い、という気持ちがすぅ、と引いてゆく。
理由は、ただひとつ。
それほどまでに、少女が美しかったからだ。
白皙のその肌の周囲が、光にけぶって見える。

――　こんなにキレイな子、初めて見た……
これ以上のものはないと思えるほど、その少女の顔立ちは完璧に整っていた。
亜麻色の細い眉は、なだらかなカーブを描いている。

その下の瞳は閉じられているが、はっきりとした二重だということは、目を閉じていても分かった。
肌の色は透き通るほどに淡く、その頬の部分は、紅をさしたようにほんのりと赤い。
少しだけ開いた唇はつやめき、かすかに、微笑んでいるようにさえ見えた。
その耳元と胸元には、名前も知らぬ、明るい翠色の宝石が光っている。

「……天使様、みたい……」
われを忘れたかのように見入っていた遊子が、ため息混じりにつぶやいた。
「生きてる……？」
ウルルが、首をかしげてつぶやく。
確かに……生きているのは不自然だけど。だからといって、死体には見えない。
夏梨は気づけば、そっ、とその少女に手を伸ばしていた。
その指先が、少女の頬に伸ばされ、今まさに触れようとしたとき……

ガシッ、と青白く太い指が、夏梨の肩をつかんだ。
「いけない子供たちだね。こんなところにまで入り込んではいけないよ」

Ｇｏｎｇ５　三人娘の挑戦（後編）

反射的に、夏梨は振り返った。
ほんの一瞬のはずなのに、それはやたらとゆっくりと感じた。
振り向いた先……ほんの１０センチほどの場所に、男の、顔があった。
格好は、古めかしいスーツを着込んだ紳士。
その顔に光がさし、はっきりと顔を目にした瞬間……

「きゃぁぁあ！！」
夏梨は、声も限りに、悲鳴を上げていた。
その男のニヤリと笑った口元からは、５センチはある犬歯がはみ出し。
そして、自分を見つめる目には瞳がなく……真っ白だったからだ。

「『秘密』を知られたからには、ここからは帰せないな」
ガタン、と長机に置かれた椅子を倒し、３人は後ずさった。
倒れこんだのか転んだのか、気づけば床に尻餅をついていたが、痛いとさえ感じなかった。

その時、やっと３人は気づいたのだ。
入り口の傍に立てかけられた、大量の棺に。
そのうちの一つの棺の蓋は開けられ、そして今まさに、傍に置かれたいくつもの棺の蓋が、かすかに揺れるのがはっきりと見えた。
「教えられなかったかな。この洋館は、吸血鬼……バンパイアの棲（す）家（みか）だと」

瞳を持たぬ、青白い肌を持つ紳士。
彼は、両手を広げ、３人のほうにゆったりとした足取りで歩み寄っていた。
その両手の爪が、見ている間にゆっくりと伸びてゆく。
見る間に、それは１０センチほどに伸びた。

――　逃げなきゃ……
でも、足が動かない。立てる、なんてとても思えないくらいに。
「逃げろっ！」
夏梨は一声叫んで、なんとか立ち上がろうと、震える足を腕で叩いた。

「だ……だめ、夏梨ちゃん……」
遊子は、焦点が合わない目で夏梨を見た。
ウルルも、その目に何も写していない。

「あ……」
棺の蓋が、次々と、床に落ちて乾いた音を立てる。
そして、そこから青白い骨ばった手が突き出す。
ビクビクともがくように蠢(うごめ)いた指が、がしっ、と棺の縁をつかむのが、はっきりと見えた。

「『こっち』に来てもらおうか」
長い、長い爪が、夏梨に向かって、ゆっくりと伸ばされた。
「ひ……」
喉元から悲鳴がせり上げると、ほぼ同時。
突然、後ろでガラスが割れる音が響いた。

「な……」

「霜天に座せ、氷輪丸！！」
迷いのない力強い声が、バンパイアの声を遮って高く響いた。
直後、夏梨を襲ったバンパイアの体が、その場で止まった。
「な……に」
見れば、足が氷でその場に縫いとめられている。
見る見る間に、氷は爪先から頭まで、全てを覆い尽くした。

「夏梨！遊子、ウルル！大丈夫か！！」
ふわり、と黒い大きな鴉のようにその場に舞い降りた姿に、夏梨はへたへたと座り込んだ。
「お兄ちゃん！！」
涙声で遊子が一護の足にしがみついた。
「おー、怖かったな遊子！もう大丈夫だ」
大きな一護の手のひらが、遊子の頭に置かれる。

「間一髪だったな」
その一護の背後に、ルキアがふわりと飛び降りた。
そして、割れたスタンドグラスの桟に飛び乗り、こちらを見下ろしている少年を見上げた。
抜き身の刀が、夕日に照らされて妖しく光った。
「しかし、貴方が現世におられるとは……日番谷隊長」

「……別に、たいした理由じゃない」
「確かにたいした理由じゃないのう」
チラリ、と日番谷が、不機嫌そうに肩に乗った黒猫を一瞥した。
「夜一殿も」
ルキアが表情を和らげる。

「急に霊圧が膨らんだからの。あわてて飛んできたのじゃが……」
「てめーは肩に乗ってただけだろ」

「細かいことは気にするな」
そして、ひょい、と下を見下ろした夜一が、棺の上に横たわる少女の姿を見て……その動きを止めた。
冷水を浴びせられたかのように固まった夜一に、日番谷は気付かず声をかけた。

「おい、黒崎、朽木！ガキどもを連れてここを離れろ。ここの掃除は俺がしとく」
「あぁ、けど……・」
一護は、気遣わしげな視線を、背後に向けた。

――　コイツら……
虚は、見慣れている。
しかし、これはまったく、虚とは別物だ、というのが見た瞬間に分かった。
ぎくしゃくとした骨ばった動き。
漂う濃厚な死臭。
張りを無くし、青白く変色した肌。
埃まみれのスーツ。裾が破れたドレス。
どちらも、戦前かと思うほどに古めかしい。

ギシ、と骨が鳴る音がした。
青白い両手をだらりと前に下げて、ひた、ひた、と一護たちに向かって歩みを進めてくる。
はっきり言って、虚の何倍も怖い。
牙をむき出したその口から、キシャァァ、と人とは思えぬ声が漏れるのを聞いて、一護とルキアは3人の少女を庇いながら、一歩後ろに下がった。

「や！やっぱりここは任せた！冬獅郎」

「死神の癖に、幽霊怖がってどうすんだ」
ため息混じりに、日番谷がふわり、と一護たちの前に飛び降りた。
「おい、冬獅郎！」
その耳元で、固まっていた夜一が、突然叫んだ。

「なんだ？うるせぇな……」
「逃げろ！相手が悪い！！」
「は？」
日番谷が、いぶかしげな眼差しを夜一に向ける。

「何言ってんだ、こんな奴らごとき……」
日番谷が、言い終わる前に、凍り付いていたバンパイアが、ニヤリ、と口角を上げた。
ただし、氷の中で。
その全身から、暴力的ともいえる力が放たれる。
そして、凍り付いていたはずの爪が、すさまじい勢いで伸びた。

「何？」
とっさに飛びのいた日番谷の頬を掠め、爪が通り抜けた。
霊圧で形作られる氷輪丸の氷は、普通の氷とは比べ物にならないほどの強度になる。
しかし、それを一瞬で砕いたその男は、笑みさえ浮かべながら、氷の残骸の中から一歩踏み出した。

「おい」
日番谷は、氷輪丸を構えながら夜一を見やった。
「さっき言わなかったか？バンパイアの力は弱くて、新人の死神でも倒せるって」
「言ったが……コイツらは、特別だ！」
「だからって……」

「先輩の言うことは聞くもんじゃ！いいから逃げろ！」
日番谷は、ムッと唇を曲げたまま、肩に乗っていた夜一をひょいとつかみ、背後の夏梨に向かって投げた。
「そいつを連れていけ！」
「冬獅郎、お主……」
「お前らが逃げたら、俺も出る」
「分かった！」
一護とルキアが、3人の少女を抱えようと手を伸ばし、日番谷が刃を構えたのを見て、バンパイアたちは、ニヤニヤと笑った。

「遅い」
「遅いわね」
「それでは」
「間に合わぬのぅ」

気がつけば、バンパイアの数は、十体近くに増えている。
そして、その全員が、上に向かって指を指し伸ばした。
正確には……空中で眠る、美貌の少女に向かって。
「眠れる姫よ、我らに力を！」
「まずい……！」
夜一の叫びが、バンパイアたちの声に重なった。

その言葉に応じるように、ふわり、と亜麻色の髪がゆらめいた。
組み合わせた手の間から、光が満ち溢れる。
「なに……？」
日番谷が肩越しに振り返り……その少女の中で膨れ上がった力に、絶句した。
刹那。

その場は、一瞬のうちに、雷のような閃光に包まれた。

Ｇｏｎｇ６　お忍びの姫君

浦原商店の縁側に立ち、ジン太は薄暗い外を見上げていた。
異様な霊圧に気づいた冬獅郎が、夜一と共に浦原商店を出て、３０分。
そしてつい数秒前、空座町の上空を覆いつくさんばかりの強い霊圧に、思わず跳ね起きたのだ。

「なんだってんだ……」
一瞬ハネあがった霊圧は、数秒おいて、ふっと嘘のように消えている。
いてもたってもいられないが、だからといって何をしたらいいのかも分からない。

イライラとジン太が振り返った時。
「うぉ！」
「きゃー！！」
何もない、薄暗い空間から、突然叫び声が聞こえた……と同時に、バタバタと何人もの人間が畳になだれ落ちた。

「おい、冬獅郎！夏梨、遊子もいるのか……？全員揃って、どうしたんだ？」
そこにいたのは、バンパイア屋敷に忍び込んだはずの夏梨・遊子・ウルル。
しかし、３人の少女は、青ざめた顔で目を閉じたまま、ピクリとも動かない。
そして、浦原商店を飛び出した日番谷・夜一。どこからまぎれたのか一護とルキアまでいる。

動ける4人はそれぞれ、無言で畳の上で身を起こした。
そして、あわてて駆け寄ったジン太を、無表情で見返す。
「……」
「こえーよ、てめーら！何かしゃべれ！幽霊でも見てきたような顔しやがって！！」
「……」
「見た、んだな」
「落ち着け」
ムンクの叫びのように口と目を見開いたジン太の頭を、がし、と一護が引っつかんだ。

「てー……」
落ちた拍子に、ちゃぶ台に頭をぶつけた一護が、うなりながら起き直った。
そして、ぐったりと脱力した妹たちを見ると、ハッと身を起こす。
「おい、夏梨、遊子！ウルル！」
「……大丈夫だろう。規則正しい呼吸をしている」
ルキアが、傍にあった座布団を枕に、三人の体を畳に横たえる。

ホッ、と息をついた一護は、思い出したように夜一を振り返った。
「おい、夜一さん。一体今のは……」
黒猫を見下ろして……ハッ、と夜一の前にかがみこむ。
「大丈夫か？」
「かまうな。ちょっと消耗する術を使っただけじゃ」
夜一は顔だけ起こして返したが、そのビロウドのような黒い腹が、激しく波打っている。

「その場の全員を瞬歩で移動させたのか？」
一護の逆側から夜一を覗き込み、日番谷がたずねた。
珍しく、驚きを隠しもしない口調である。

「今のところ、儂しかできん術じゃ」
猫の姿でなければニヤリと笑っていただろう、と思わせる声音で、夜一が返した。
しかし、身も起こせずにあえいでいる夜一の姿は痛々しかった。

「冬獅郎。お主、いますぐ瀞霊廷に戻って、山本総隊長に会ってくれ」
一護に抱き起こされながら、夜一が日番谷を見た。
「そして伝えるのじゃ。『緋鹿(ひが)家の姫君がバンパイア共の手にある』と伝えれば、
コトの重要さは伝わるはず」
「……緋鹿、だと？」
日番谷が、不可解な表情で夜一を見返した。

「どういうことだ。確か緋鹿って言ったら、王廷に御座(おわ)す王族の一つじゃねぇか。
現世にいるなんてありえねえだろ？大体、なんでアンタが王族の顔を知ってる」
日番谷は、夜一に向き直った。
さっきまでとは打って変わった、鋭い眼光がコトの重大さを物語っていた。

「儂のおった四楓院家は、王廷から下賜された神具を預かる役割を持っておる。
もともと、瀞霊廷の誰よりも、王廷との関連は深いのじゃ。
それに、その姫は有名でな。儂が現世で暮らすようになってから、何度か名を聞いた」
「何でだ？」
「その姫。緋鹿恵蓮(エレン)という御名なのじゃが、現世が好きという変わ

った姫でな。
よく周囲の目を盗んで、お忍びで現世に来られているそうじゃ。儂も会ったのは初めてじゃが」

「……勘弁しろよ」
日番谷は髪に手をやり、ガシガシと掻いた。
王廷といえば、瀞霊廷の死神にとっては絶対の存在だ。
「今回も、お忍びで降りてきてる時に、バンパイアに捕まったってことか」
「……じゃろうな」
日番谷と夜一は、揃ってため息をついた。

「ソウル・ソサエティには王様までいんのかよ！強ぇんだろうな、そいつ！」
その場の空気に全く気がつかず、ジン太は目を輝かせる。しかし、
「ゲームのやりすぎだ・・・」
ため息混じりに、日番谷はそのコメントを切って捨てた。
「なんだよ、強くねぇのか？」
「強けりゃ、バンパイア如きにつかまるかよ。本来、普通の死神なら十分倒せるレベルだぜ？」
「そのバンパイアにやられて帰ってきたのはオメーだろ」
口を尖らせたジン太に、ぐっ……と珍しく日番谷が言葉に詰まった。

――「眠れる姫よ、我等に力を」
バンパイアたちは、確かにそう言った。その直後、あの爆発が起こったのだ。
とすると、王族だけに、何らかの超自然的な力を持っているのはありえそうなことだった。
「隊長でも、王族のことは分かんねーもんなのか？」

話の成り行きを見守っていた一護が、畳の上に胡坐をかいて、日番谷と夜一を交互に見た。
「例えるなら神話じゃな。〇〇という神が天地を想像したとか、王族というのは、そういうレベルじゃ」
「……ホントにかよ？」
「だから神話じゃと言っておるじゃろ。真偽のホドなんて考えるだけムダじゃ」
そんな神話に出てくるような神様が、空座町の隣町までやってくるなんて。
でもまぁ、猫の姿をした元死神としゃべっている現状を見れば、もはや何も言うことはないのかもしれない。
一護は不審半分、感動半分の気持ちで頷いた。

「とにかく。総隊長に指示を仰ぐ。こんな面倒臭ぇことは御免だ」
日番谷は、珍しくやさぐれた口調で言うと、立ち上がった。
瀞霊廷に戻るつもりらしい。
超高貴な生まれという時点で、流魂街生まれの日番谷には手に負えない……というより、負いたくない。
その上、子供で女。関わるのは御免こうむりたい、と日番谷は思った。

「なるべく早く頼むぞ」
「あぁ」
日番谷は、夜一の言葉に短く頷くと、その手のひらを、ふっと上空に向けた。
その手のひらの上に、影のように黒い揚羽蝶が、ふわりと舞った。
死神がソウル・ソサエティとの行き来に利用している使い魔の一種、地獄蝶である。

「開錠」
氷輪丸の切っ先を向けると、目の前に和風の扉が出現する。
地獄蝶を案内役に、死神だけが開くことを許される、あの世への扉
『穿界門』だ。
「冬獅郎！」
その背中に声をかけた一護に、日番谷は振り返った。
「お前たちは動くな」
それだけを言い残し、日番谷は扉に手をかけた……が、通り抜ける
ことはできなかった。
なぜなら。
日番谷が手をかけた瞬間、穿界門が向こう側から勢いよく引き開け
られたからだ。

「あっ？」
日番谷がとっさに手を離して室内に下がる。
穿界門の内側から、巨大な何かが、すさまじいスピードで突進して
きたからだ。
それが、日番谷の身長くらいある「左足」だと気づいた時には、ダ
ン！と音を立て畳に踏み入れられていた。
「ひゃっはァ！」
男の野卑な叫びと同時に、巨大な刃が、日番谷の頭上にまっすぐに
振り下ろされた。

ーーーーーーーーーーーーーー
※ちょっと補足。
恵蓮はｒｏｏｔｓとかａｃｏｓｔｉｃ　ｂｌｅａｃｈとかちらほら

登場してますが、
人物設定はどの作品も共通のものです。

えらい順は下記の通り。「王家」のみ、オリジナル設定です。
霊王＞王家＞王属特務＞中央四十三室＞護廷十三隊

Ｇｏｎｇ７　前途多難な救出者

「冬獅郎！」
一護がとっさに身を乗り出すが、間に合わない。
日番谷は、男の左足をみやると、ひょい、とその膝の上に飛び乗った。
チッ、と振り下ろされた刃が、日番谷の髪を掠る。
銀色の髪が、部屋の中に舞い散った。

「隊長！」
男の背後から、別の男の声が聞こえ、一護は耳を疑った。
――　この声！
日番谷は動きを止めず、刀を鞘ごと背中から引き抜いた。
そして、その柄尻で男の顎を思い切り突いた。

「ぐっ？！」
叫びと共に、男の体が背後に弾き飛ばされる。
そのとき、チリン、と鳴った鈴の音と、ハリネズミのような独特の頭が一護の位置からも見えた。

「……」
その男が穿界門の向こうに弾き飛ばされたのを確認すると、日番谷は再びピシャリ、と穿界門をとざした。
「おい、冬獅郎」
「……」
「今の奴ら……」
「言うな」
日番谷が、ウンザリしたとしか言いようの無い顔で一護を見返した

とき。
再びパシン、と音をたてて扉が開かれた。
「ひっつーん！！」
バン、と顔に飛びついてきたピンク色の「それ」を、日番谷は必死に引き剥がそうともがいた。
「バカヤロ、息、できね……草鹿！」
「あめーんだよ、ガキ！」
その背後から現れたのは、顎を紅く腫らせた更木だった。
「そんな突きで俺を殺せると思ってんのか？」
「お前を殺すほど、俺は……ヒマじゃねー！！」
一護に、やちるを剥がすのを手伝ってもらいつつ、日番谷がゼーゼー言いながら更木を見上げた。
その背後から、ゾロゾロと土足で畳の上に足を踏み入れてきたのは、現世で見ると場違いなこと甚だしい、十一番隊の面々だった。
一角、弓親、そのほか頑強そうなのが十人近くいる。

日番谷の視線が、更木、やちる、一角、弓親、その他十一番隊の席官たちの間を滑った。
「へぇ……」
感嘆の入り混じった侮蔑の視線（この両方を同時に示すのは十一番隊くらいのものだろう）を向ける。
「相変わらず、なんともムカつく態度だな、ガキ大将」
「ほぉ、腹立ったか。いい気持ちだぜ」
減らず口を叩く二人をみて、夜一がわざとらしい咳払いをはさんだ。
「それにしても、てめーエラく早いじゃねーか」

腕を組んで、日番谷は更木を見上げた。
尋常ならざる霊圧が空気中に放たれて、わずか30分あまりしか経っていない。
それなのに、いきなり隊長を含む一団が派遣されてくるなど、めったにあることではない。

「山本のジィさんが、いつになく慌ててんだ」
更木は日番谷を見返し、後頭部を掻いた。
「相手が王廷の姫だからか？」
「それもある。だが、王廷側は即効、姫を助けるために刺客をこちらに送り込んだらしい」
「結構じゃねえか。そのまま任せておけば」
「その刺客、強ぇらしいぜ。この辺一帯灰燼（かいじん）に帰すくれえにな」
ぶっ、とジン太が口にしていた茶を吹いた。

ぽん、と一護がその隣で手を打った。
「そっか、それでお前ら、刺客が来る前に助け出そうって言ってくれんだな。案外いいトコ……」
「あ？」
「いいトコあるんじゃねぇか」と一護が言い終わる前に、更木はジロリと一護を見返した。
「刺客が来たら、一騎打ちを挑むに決まってるだろうが！
王廷の関係者と戦える機会なんて、めったにねえぞ」
「待て！そしたら空座町は！！」
「焼き尽くされる町並み、逃げ惑う人々。……廃墟になるのう」
飄々（ひょうひょう）とした口調で、夜一が口を挟み、更木は頷いた。
「それでもいーんだよ。何しろ目的は、姫を救うことだからな」
「一見筋が通って……るワケあるかぁ！」

一護がダン、とその場に足を突いて立ち上がった。

「何だって総隊長、こんなヤツら寄越(よこ)したんだ……」
日番谷がウンザリ、という表情も露(あらわ)に、ため息をつく。
「お？なんだ？てめぇ。俺の代わりに吸血鬼倒してくるか？」
――　案外、ちょっとくらい血ィ吸われたほうが、血の気が減っていいかもしれねぇ。
ぐい、と顔を突きつけた更木の顔を見て、日番谷は考えを改めた。
大体、バンパイアよりよっぽどこっちのほうが悪役面だ。

「で！姫の顔は分かってんのかよ？目的が分かってんなら、当然分かるよな？」
「あぁ？そんなの、俺が知らなくても一角が……」
更木が背後の一角を見やる。無い無い、と一角が手を振り、弓親を見やる。
知るわけないですよ、とオーバーに肩をすくめ、手のひらを上に向ける弓親。
「やる気あんのか！？」
「あぁ、殺る気満々だぜ俺達は！姫が死んだら、そいつの寿命だ」
なにしに行くんだ、こいつらは。
夜一と一護と日番谷は、同時に同じことを思った。

「あたし分かるよ！さっきおじいちゃんに教えてもらったの」
やちるがハイ、と手を上げた。
「髪の毛が亜麻色で、すごーいキレイな女の子でしょ？お姫様見たーい！」
目的が違う上、髪の毛しか的確に特徴を掴んでいないが、それでも他の隊士よりはマシだ。

「まぁ、更木とて一応隊長の端くれだ。要はバンパイアを倒せばよいのだ。
あのバンパイア共と進んで戦ってくれそうな面子(メンツ)は、確かに十一番隊くらいのものじゃしな」
それは……確かに。
日番谷は、耳打ちしてきた夜一の言葉に、嫌々頷く。
変に反対して、日番谷もついていくことになったら、正直言ってやってられない。

「よーし、野郎共！敵をぶっ殺して、さっさと引き上げるぞ！」
「……姫は」
一抹の不安を残しつつ、十一番隊の面々は、バンパイア屋敷へと乗り込んだのだった。

Ｇｏｎｇ８　三副隊長の挑戦（前編）

それから、二日が経過していた。
縁側で座布団の上に乗っかった夜一が、くぁ、と大きな欠伸をした。
にゃむにゃむ、と猫の寝言のような声を漏らし、座布団に再び顎（あご）をうずめる。
その横では、浦原が大柄な体を投げ出してうとうとと眠っていた。

「おーい！新しいソウル・キャンディーはあるか？」
店先から、ルキアの声が響く。
「はい、チャッピーが入ってます」
「ホントか？」
ウルルと、弾んだルキアのやり取りが家の中まで聞こえてくる。
「あんなんのドコがいいんだよ。頼むからもっとマトモなのにしてくれよ」
ついて来たらしい一護の、ウンザリした声が続く。

「お買い上げありがとうございました」
「ではな、ウルル」
「じゃーな。……」
「ど、どうしたのだ一護？」
ピク、と夜一が反応した。
そのまま居眠りを決め込もうとしたかのように、もう一度座布団に寝なおす。

ドタドタドタ……と廊下からの足音がどんどん大きくなる。
バーン、と音を立てて、障子が引き開けられた。
「じゃーな、じゃねぇ！！なに、何もなかったことにしてんだ！姫

はどーなった、姫は！！」
一護が顔を覗かせると同時に、怒鳴った。

「まーまー、お待ち、くださいよ、黒崎、サン」
がっくんがっくん、と一護に肩を揺さぶられながら、浦原が途切れ途切れに言葉を発した。
「ハナシは夜一サンから聞いてますよ。
十一番隊が乗り込んだにも関わらず、街も滅亡していない。
思ったより、よっぽどマシな状況じゃないですか」
「本来の目的はソレじゃねーだろ！姫は。今十一番隊はドコで何してんだ？」
「さぁ？」
サラリ、と浦原が言い放ち、一護は凍りついた。

「さぁな、じゃねーだろ！俺が行く！！」
「まぁ待て、一護」
今すぐにバンパイア屋敷にすっ飛んで行きそうな一護を見て、夜一が身を起こした。
「考えても見ろ。なんで奴らが戻ってこないと思う？」
「何でって、そりゃ……」
一護が視線をあさっての方向に泳がせた。
「そりゃぁ……」
夜一が、フフン、と笑う。
「あまり、関わりたくない気持ちになるじゃろ？」
「気持ちは分かるけどよ。臭いモンにはフタしたいけどよ。だからって」

そのとき。
二人は同時に、視線を家の外に向けた。

ちょうど、バンパイア屋敷があった方向。そこに、強い霊圧が三つ、現れたからだ。

「この気配は……恋次！？」

一護の後をついて部屋に入ってきていたルキアが、目を見張った。
「それに、雛森サン、吉良サンもいますね。進展なしと見て、副隊長を揃えてきたようですね」
浦原がくるり、とその場で胡坐をかいた。
「進展が無い、くらいだったらまだいいがな」
夜一は悲観的なことを言いつつも、再び座布団の上で丸くなる。
「まぁ、今回の戦いで、誰か殺されるような事態は考えにくいですしね。
リハビリにはちょうどいい、てトコでしょう」
「……リハビリどころか、トラウマにならねばよいがな」
言葉とは裏腹に、夜一がまたひとつアクビを漏らした。

果たして、バンパイア屋敷の三人は、文字どおり「佇んで」いた。
かれこれ１０分ほど。
「あたし、こういうの苦手だよ～……」
吉良の後ろに隠れて、雛森がひょい、と顔を覗かせて、目の前の屋敷を見やる。
その黒目がちな大きな瞳は、目の前の恐怖と、やらなければいけない仕事の間で揺れている。

「だっ、大丈夫だよ、大丈夫！！」
雛森の肩が背中に触れ、ドキッ！と吉良が肩を揺らす。
のけぞったまま、後ろの存在を気にする吉良に、
「モジモジしてんじゃねー！」

恋次が蹴りを食らわせて、大きくため息をつく。

真央霊術院の六年間を通し、同じクラスだったこの二人のことは、知りすぎるくらい知っている。
この吉良が、雛森に淡い慕情とやらを抱いていることは、雛森以外の全員に知れ渡っていた。
そして、吉良の腰の引けぶりから見て、その思いがかなうことは未来永劫ないだろうことも。

「とにかく、行くぞ！十一番隊が戻ってこねーんだ、油断すんなよ」
面倒くさそうな表情を隠しもせず、恋次が斬魂刀を肩に担いだ。
全く、高貴な姫だか知らないが、面倒なことを持ち込んでくれる。
しかも十一番隊も、一体どこに遊びに行ってしまったのか行方不明などとは、無責任にもほどがある。

「だ、大丈夫だよ雛森君！ホラ、これを見て」
吉良が、モゾモゾと懐から何かを取り出した。
「ホラ、現世で買ったんだ。魔を払う力があるっていう十字架！！」
キラーン、と光るそれを見て、雛森が目を輝かせる。逆に恋次は眉根を寄せる。
「……オイクラで？」
「えーと、今電話なら大安売り！で、５万円くらいだったかな」
「たけー！たけえよ、それは！現世のボッタクリに騙されんじゃねー！」
やってられない、と恋次が頭を押さえる。
こいつらが現世に住んでたら、すぐに全財産を怪しげな商法で取られてしまいそうだ。
大体、死神が十字架を持つって言うのは、宗派違いではないだろうか。

「……俺一人で行く！！」
恋次は気が短い。
いち早く元学友に見切りをつけると、静まり返ったバンパイア屋敷に向かって、足を踏み入れた。
「えっ、ちょっと待ってよ阿散井君！おいてかないで！」
「ぼ、僕も行くよ！」
走ってくる二人を振り返らず、恋次はやたら重い扉を開いた。

「こ、こりゃ……」
戸を開けると同時に、恋次は顔をしかめた。
――　本気でヤベェ、かも。
霊圧とは種類を異にする、禍々しい「瘴気」ともいえる気配が、ドッと三人に襲い掛かった。
「遊んでる場合じゃねえぞ。ついてくるなら本気で行け」
この状況で、一番マトモなのは自分らしい。
恋次は斬魂刀を油断無く構え、建物の中に足を踏み入れた。

広いロビーの中は吹き抜けになっており、螺旋階段が上へ、上へと続いている。
３階建てだけあって、ロビーの高さも１０メートルはくだらないと思われた。
もとは白かったと思われる天井は、埃で白く汚れ、あちこちに蜘蛛の巣が張っていた。
明るい午後の光の下で見ても、陰気な感じは全くぬぐえていない。
死神が言うのも何だが、確かに何か「出そう」な雰囲気である。

「……何しにきやがった。てめえら」
「出たぁ！！」
びく！と吉良と雛森が肩を震わせた。
「誰だ！」

建物が、声がこもるような構造になっているせいで、どこから声が聞こえてくるのか分からない。
恋次は周囲を見渡して怒鳴り返した。

――　待てよ。この声……
「返り討ちにしてやるぜ」
「……ちょっと待ってくれ、アンタ」
恋次の記憶が、ボケてしまっているのではなければ、この声は。
「アハハハ！返り討ち～！！」
続けざまに聞こえた少女の声に、さすがに吉良と雛森も気づく。
雛森が、おそるおそる周りを見回した。
「……今の声」
「やちる！お前、やちるか！更木隊長、一角サンまで一体何を遊んで……！」

「くたばれやァァ！！」

ハッ、と恋次が天井を見やった。
螺旋階段の3階の部分から、一斉に影が落ちる。
「ちょ……一角さん、弓親さん、何を！！」
とっさに前に出た恋次が、斬魂刀を解放する。
刀を同時に打ち下ろして来た二人を、刀と鞘で打ち返した。

Ｇｏｎｇ８　三副隊長の挑戦（前編）（後書き）

昨日、ＨＰをオープンしました！
「小説家になろう」の更新が滞ってる時は、ＨＰ上をふらふらしてるかも＾＾；
ｈｔｔｐ：／／ｗｐａｐｙｒｕｓ．ｎｏｂｏｄｙ．ｊｐ／

Ｇｏｎｇ９　三副隊長の挑戦（後編）

刃と刃が真っ向から打ち合い、火花が周囲に飛び散った。
一角の鬼灯丸と、恋次の蛇尾丸の刃が鍔迫り合い、互いの筋肉がきしむ。
「やるじゃねーか。押し返すなんてよ」
ニヤリ、と一角が凶悪な笑みを浮かべた。
二人の一騎打ちを見た弓親が、背後にヒラリと飛び降りた。
一対一を絶対のルールとする二人が、同時に打ち込んでくることはなさそうだが・・・
だからといって、恋次の劣勢に代わりはない。
「ちっ！」
二人の刃が離れ、恋次は、ビリビリと震える腕を押さえた。
何だ？
一体、どうなっている？
そこまで考えた時、吉良がくぐもった悲鳴を上げた。

「あぁ？何だよ吉良？」
「首！斑目三席と、綾瀬川五席の首に、傷が……」
傷くらいどうした、というにはあまりにも、吉良の声は怯えていた。
「その噛まれたような傷、まさか……」
噛まれたような傷。
その吉良の言葉に、恋次も二人の傷を凝視した。
確かに……何か犬のような動物に噛み付かれたような傷跡が、二人の首元にも見える。
「あの……まさか、二人とも？」
恋次は恐る恐る問いかけた。
「バンパイアに噛み付かれたら、バンパイアになる」
恋次も、そのことくらいは知っている。

「あぁ！たりめーだろ！」
がっかりするくらい堂々と、一角は胸を張った。
「僕らは確かに、バンパイアは全員倒したさ。バンパイアなんて僕たちにかかれば、相手じゃなかったね！棺に叩き返してやったよ。まぁ、そろって噛み付かれる、ていう想定外なことは起きたけど、たいしたことないだろ」
フッ、と微笑んだ弓親の口元から、キラーン、と人にしては長すぎる犬歯が覗いた。

「なにが『たりめーだ』ですか！何やってんですかアンタら！」
「腹、減ったな……」
舌なめずりした一角を見て、恋次が一歩、後ろに下がった。
下がろうとして、その背中が止まる。
「さ、下がんないでよ」
怯えきった雛森が、恋次の背中を押している。

「ま！待って……」
「血ィ飲ませろや、コラァ！」
野卑な叫びと同時に、他の十一番隊の隊士たちも、一斉に三人に覆いかぶさるように飛び掛った。
もはや「死神」というより、歯をむき出したバンパイアそのものの姿だったが。

「ヒィィィ！」
吉良が悲鳴を上げ、懐に手を突っ込む。
「えーと……悪を浄化する聖水！！」
その小さな瓶は、弓親の頭に当たってカシャンと割れた。
「く……臭い！なんだコレは！」

弓親が大げさに悲鳴をあげて、背後に飛びのいた。
しかし、その匂いに反応しているだけで、効いているとはとても思えない。

「ここに来る前、路傍の老女から千円で買った聖水です！」
「そんな胡散臭い水、この僕にかけないで欲しいね！！」
どうやら逆効果だったようだ。
弓親が、吉良に矛先を変える。

恋次はそれをフォローする気にも、もはやなれなかった。
「えーと、えーと、バンパイアには……コレだ！！」
そう言って吉良が続けざまに取り出したものを見て、弓親の顔が引きつった。
「ま、待て、そんな美しくないものを、この僕に……」
「食らえ！！」
弓親に負けず劣らず必死な表情で、吉良が懐から取り出した「ニンニク」を弓親に向かって投げつけた。

「……」
周囲の空気が固まる。
それがバンパイアと化した弓親に効くかどうか、ということはどうでもいい。
頭からニンニクをかぶった弓親が、プルプルと震えだす。
ものすごい臭気が、辺りから立ち上った。

「ふ……」
弓親が一歩歩むと、懐からニンニクが2・3個、ボトボトと落ちた。
「キ・サ・マ……」
吉良が、体裁も何もなく、後ろへ跳び下がる。
「死ねぇぇぇ！！」

「ひ、ひいいいい！」
情けない悲鳴が上がった、直後。
弓親が、吉良の首筋に食いついた。
「きゃぁぁぁ！」
雛森の悲鳴が木霊し、ガックリと吉良がその場に崩れ落ちた。

「い……いや」
ぺったり、と床に座り込んだ雛森が、座り込んだまま背後に下がった。
その雛森に、ニヤニヤと笑いながら十一番隊士たちが歩み寄る。
「とっとと仲間になっちまったほうがラクだぜ？なに、一瞬だ」
「雛森！」
恋次が、雛森と隊士の間に割って入った。
「お前は、この建物から出ろ！で、瀞霊廷に帰って報告するんだ！」

「う……」
それでも、雛森は怯えた目を、元同僚だったバンパイア達に向けたまま、動こうとしない。
「ちっ」
恋次が、斬魂刀を隊士たちに向けた時だった。
「いやぁぁぁ！！！」
何の前触れも無く……突然、雛森が暴発した。

「何だぁ？？」
背後からの熱風に煽られ、恋次がとっさに横に避ける。
「う……」
まるで少女のようにしゃくりあげながら、雛森が一歩、前に踏み出した。
それを見て、ざっ、とバンパイア達が背後に下がる。
雛森が鬼道の達人だということを知らぬ者は、瀞霊廷には一人もい

ないからだ。
そして、稀に起こる彼女の暴発を、止められる者はいない……ということも。

スッ、と雛森がその手を前に向けた。
「しゃ……赤火砲！赤火砲！赤火砲――！」
「うぉぉおっ！？」
爆発的にあがった紅蓮の炎が、建物の中に充満し、恋次を含めた全員がその場から逃げ惑った。
「お！落ち着け！落ち着いてくれ雛森！！」
恋次の声も、雛森は聞いちゃいない。
「ま……待った待った！」
一角と弓親まで焦っているのが、コトの深刻さを物語っていた。
――　このままぶっ壊し続けたら、建物外にも被害が出るぞ！？
空座町謎の丸焼け、という言葉が胸をよぎった、その時。
「きゃはははは！」
およそ場違いな少女の笑い声が、周囲によく通った。

「や……やちるちゃん？」
その声は、混乱しまくっていた雛森にも届いたらしい。
乱発しまくっていた鬼道を雛森が修めたとき。
その肩の上に、ひょい、とピンク色の影が乗った。
「ももちゃん！！」
にこー、と笑うその表情に、雛森はホッと息をつく。
「よ……よかったぁ、やちるちゃん。ていうか、あたし今何してたの？」
ブスブスと煙を上げているロビーを見回し、雛森がキョトンと小首をかしげた。
「いいから。おめー、出ろ？ここから出ろ、早く」

一角がシッシッ、と雛森を追い払う仕草をした。
しかし、その腰が引けている。
怒り狂う女の鬼道には勝てない。恋次は、十一番隊の限界を思った。
しかし、そんなことは今どうでもいい。

「やちる……おめ、歯見せてみろ」
「ほぇ？歯？」
やちるが、キョトン、と小首を傾げた。
そして、大きく口を開けてみせる。
その口の中を見やった恋次の表情が、見る見る間に凍りついた。
「雛森！やちるから離れろ！」
「え……」
その時にはもう遅かった。
大口を開けたやちるが、そのまま雛森の首筋にパックリと噛み付いたのだ。
「……あっ？」
雛森の顔から、一気に血の気が引く。
「雛森っ！！」
駆け寄ろうとした恋次の目の前で、その体がぐったりとくず折れた。

「ま、まさか。俺一人になった？」
恋次が、額や頬からイヤな汗を流しながら、背後に下がった。
その恋次に、バンパイアと化した十一番隊の連中が、ニヤニヤしながら歩み寄る。
「ま、ここに来たのが運の尽きだな、恋次」
ズイ、とバンパイア達を押しのけて現れた男に、恋次の顔が泣きそうに歪んだ。
「カンベンしてくださいよ、更木隊長！
それにだ、このままここに居たら、王廷の刺客とやらに成敗されてしまいますよ？」

「あぁ？それのどこかまずいんだ。元々俺らは、刺客とやらと戦うためにここに来たんだからよ」
なんでよりにもよって十一番隊が派遣されたんだ。
恋次は、後ずさりながら日番谷たちと同じことを考えた。

「俺を倒せたら、見逃してやってもいいぜ？」
更木が腰の刀を抜き放つ。
――　どうする……
斬魂刀を自分も抜き放ちながら、恋次は心中考えた。
今、身を翻して逃げてしまえば、逃げ切れるかもしれない。
少なくとも、更木に勝つのに比べれば、そっちのほうがよほど可能性がある。
しかし……

「ほぉ。いい度胸じゃねえか。さすが元十一番隊だ」
更木に刀を向けた恋次を見て、一角がニヤリと笑った。
――　試してみてぇ……
更木の元から離れ、六番隊の副隊長に抜擢されてから、まだ一年も経たない。
でも、六席に過ぎなかった頃と、卍解をも会得した今の自分は明らかに違う。
試してみたかったのだ。かつて最強と崇めていたこの男に、自分がどこまで迫れるのか。

緊張が、恋次を包み込む。
しかしそれは、さっきまでとは違い、どこか心地よいものだった。

更木がゆっくりと刀を構える。
恋次が、今にも飛び掛らんばかりに腰を落とす。
十一番隊士たちが、それを固唾を呑んで見守った、その時　――

ガッ、とふたつの手が、恋次の両肩を掴んだ。
「へ」
振り返った先の人物を見て、恋次の表情が固まった。
「ヒドイよ阿散井君、一人だけ助かろうなんて……」
恨みがましい顔をした吉良が、そこにはいた。
「ゴメンね阿散井君、申し訳ないと思ってるんだけど……」
頬を赤らめた雛森が、にっこりと微笑んで顔を上げる。
「どうしても、血が飲みたいの♪」
その口元から覗いた鋭すぎる犬歯を見て、恋次が言葉にならない悲鳴を漏らす。

「……あー、悪ぃな、恋次。こいつら十一番隊じゃねえし」
「そりゃないスよ、更木隊長！あぁっ、ちょっとカッコイイことするつもりだったのに！」
ぶち壊しだ、という声は、自分自身の悲鳴にかき消された。

Ｇｏｎｇ１０　大物、ついに動く

それから、一日後の瀞霊廷。
場所は十三番隊隊舎の奥にしつらえられた隊長専用の居室、雨乾堂である。
「……」
日番谷と浮竹は、縁側に並んで座り、無言で上空を眺めていた。
下には座布団、手には湯のみを持っている。
何も知らなければ、ご隠居と孫の語らいに見えなくもない。

「なんだろうねぇ、面白いものが飛んでるね」
「あんまり面白そうじゃないっス」
ギャァァァ、と物騒な鳴き声を漏らして飛び交っているのは、どうやらコウモリのようだ。
こんなモノが瀞霊廷に現れるなど、前代未聞である。
ただ、例えば怪獣出現ならいざ知らず、コウモリ如きどうということもない。
前代未聞だろうが、特に反応するまでも無い、ということだ。
日番谷と浮竹は、そろって視線を手の中に戻し、ともに茶をすすった。

――　いや待て。コウモリ……？
日番谷は、ふと考えを巡らせた。
コウモリといえば、バンパイアの遣いとも言われてたか？
頭の中に、数日前に忍び込んだバンパイア屋敷がよみがえっていた。
あの後、十一番隊の探索に、雛森・恋次・吉良が出向いたと聞いたが、果たしてどうなったものか。
「おや？なんだかこっちに飛んでくるよ」

浮竹のノンビリした声に、日番谷はハッと顔をあげた。
確かに、何羽かいるコウモリのうち一羽が、日番谷たちのいる庵に向かって舞い降りてきていた。
「ン？」
足に、何か紙のようなものを掴んでいる。
そのコウモリは、ペッ、と日番谷の近くにそれを落とすと、再び鳴きわめきながら上空へ舞い上がった。

「……捨てろ、浮竹。バイ菌がついてるかもしれねーぞ」
「でもこれ、シロちゃんへ♪て書いてあるよ」
「あん？」
日番谷は、チラリと視線をその紙へと走らせた。
いくらマジ切れしようと、自分のことを「シロちゃん」なんぞと呼び続ける人間は一人しかいない。
その筆跡を確認した日番谷は、不審そうに思いっきり眉根を寄せながら、それを摘み上げた。
はっきり言って、そうとう嫌な予感がする。

浮竹が、紙を開いたまま固まっている日番谷の背後から、覗きこんだ。
「『バンパイア屋敷であたしとデートしようよ☆桃☆』」
ぐしゃ、と日番谷がその手紙を握りつぶす。
「どうしたんだい日番谷隊長、人からもらった手紙を握りつぶしちゃ……」
「不穏だ」
日番谷は短く言うと、黙って立ち上がった。
この短い手紙の、全ての単語が不穏だ。

「浮竹隊長、日番谷隊長！」
その時。庵の前の庭園に、一人の隠密起動が降り立った。

現世とソウル・ソサエティを行き来する、死神の中でも忍の役割を担う者だ。
「どうした？何事だい」
さすがに浮竹が立ち上がり、縁側から、跪いたままの隠密起動を見下ろした。

「申し上げます。現世に赴かれた吉良・雛森・阿散井副隊長が、敵に取り込まれました！」
後を追って縁側に出てきた日番谷の表情が、ひきつる。
「取り込まれたって、具体的にはどうなったんだ。まさか……」
「バンパイアになられました」
これ以上ないほど具体的に、隠密起動は日番谷に答える。
ブッ、と浮竹が口に含んでいた茶を噴出した。
「って、オイ！更木は！十一番隊はどうしたんだ！」
「バンパイアになられました」
「……」
ぐうの音もでない、という表情で、日番谷と浮竹が黙り込んだ。

そんな二人に、淡々とした口調を崩さず、隠密起動が言葉を続ける。
「今届いたのと同じような手紙が、阿散井副隊長から檜佐木副隊長宛にも届いています」
「吉良は誰に送ったんだ？」
「いえ、吉良副隊長からは、何も」
アイツ、友達少ないからな……こんな場面なのに、日番谷はちょっと気の毒に思った。

しかし、これは最悪の事態だ。日番谷はウンザリしつつ思った。
いつ王族の息がかかった刺客が到着するとも限らないのに。
もし刺客とやらがたどり着いて、対峙する相手が十一番隊と副隊長達だったら、おふざけにもほどがあるだろう。

――　失態だ……
これを失態じゃないとして、他にどんな失態があるのか、ちょっと日番谷には思いつかなかった。

「しかし、これは困った事態だね。十一番隊と、副隊長3名がバンパイア化してしまうなんて……」
浮竹が、茶飲みを持ったまま、うーん、と指で顎の辺りをこすった。
パッ、と名案を思いついたような顔で、日番谷を見下ろす。
「いっそ、全員死神からバンパイアになってみるかい？
藍染たちも全員バンパイアにしてしまえば、また仲間に戻れる……
あぁ茶が凍ってる、凍ってるよ日番谷隊長！！」
「アンタはいつも貧血気味だから、血ィ吸われたら死にます」
にべもなく日番谷は言い放った。

「で？総隊長には報告済だろ？総隊長はなんと」
日番谷は縁側の端に出て、隠密起動の垂れた頭を見下ろした。
浮竹の案は言語道断として、確かにまずい状態なことは確かなのだ。
「はい。総隊長からの命は既に降りています。
……日番谷隊長。貴方に、とある隊長のフォローに入っていただきたいと」
「あぁ？」
あからさまに日番谷が顔をしかめた。
無理もない。
隊長同士は年次を問わず対等のはずなのに、誰かのフォローに入れといわれて愉快なはずがない。
「誰だよ」
不機嫌さを露にした日番谷に、口ごもりながら隠密起動は、その名を告げた。

「……早く行ったほうがいいよ、日番谷隊長」

「……だな。行ってくる」
さきほどまでの不機嫌はどこへやら、ヒュッ、と日番谷が瞬歩で姿を消す。

「あ、あの、浮竹隊長……」
「まーまー、君も茶でも飲んでいきなよ」
日番谷がおいていった湯呑を片付けながら、浮竹が隠密起動に笑顔を向ける。
「し、しかし、そんなことをしていても良いので……」
「あぁ、かまわないさ」
イタズラっぽく浮竹は笑う。
「何しろ、あのお母さんは最強だから」

Ｇｏｎｇ１１　戦うお母さん（前編）

チッ、チッ、チッ。
時計の針が、ゆっくりと時を刻んでいる。
「日が暮れる……」
雛森は、ステンドグラスの向こうに沈む、夕日を眺めてそう言った。
そして、その教会のような空間に、ふわりと浮かんだ台座に目をやる。

「それにしても、本当に綺麗な子ね。王族のお姫様だって、言われなくても分かるくらい」
棺の上に座り込んだまま、台座を見上げた。
――　あたしだって……！
もうちょっと顔が小さくって、色が白くて、スタイルがよければ、人生変わっただろうか。
もしかしたら、藍染隊長にも見捨てられずに済んだかもしれない。
日番谷から投げつけられた一言が、胸によみがえる。
――　おめー、あと十年も寝ねーと、アレに追いつけねーぞ。
アレ、とは乱菊のこと。
そりゃ、あんなスタイルと比べたりしたら、あたしなんか……！
ていうか、死神の中でも一・二を争う子供体体型な日番谷に、なんでそんなことを言われなくてはならないのか。
「はやく来ないかなァ、シロちゃん☆」
突然、異様に上機嫌になった雛森を遠巻きにしながら、吉良が恋次を見上げた。

「来るんだろうね？他の死神たち」
「そりゃ、こっち来いって手紙書いといたから、来るんじゃねーの？」

「お腹すいたなぁ。早く来てくれないと飢えるんだけど……」
のんきなものである。二人の会話は、瀞霊廷にいるときと全く変わらない。
ただ……二人の口の脇から、長すぎる犬歯がはみ出しているのを除けば。

その時だった。
「おい！死神が誰か来たぞ！」
見張りに立っていた十一番隊士の声に、三人はハッと顔を上げた。

「おい！どこだ！」
「玄関からです！」
「また律儀だな……朽木かぁ？」
建物の中に、死神……だったバンパイアたちの声が響き渡る。
ダン、と足音を立て、三人が玄関前にたどり着いた時には、十一番隊の面子は既に顔を揃えていた。

「どいつだ……？」
「日番谷に千円！」
「いや、檜佐木に五十円」
「安いな……俺は朽木に二千円だ！」
本人達が聞いたら、まとめて脱力するような会話が飛び交う。
「ジーさんじゃなければ何でもいい！あのジーさんの血、まずそうだしな……」
更木の言葉に、一同が頷いた。その時。
ぎぃぃ……ときしんだ音を立てて、扉が開いた。

「お邪魔します」

まるで普通に、淡々すぎるほど淡々と、扉をひき開けて現れたのは、日番谷だった。
「……」
とっさに、その場の全員がリアクションを取れずに立ちすくむ。
「ひ……日番谷君？」
「逃げたほうがいい……」
淡々としているのではない。どっぷりと疲れ果てているのだ。
雛森が日番谷の無表情を見て、そう察したとき。
日番谷は中に入り、外にいた人物を招き入れた。

そして。
そこにいたのは。
「皆さん、いい夜ですね」
上機嫌……とさえいえる笑みをたたえた、卯ノ花烈だった。
瀞霊廷で見かけるのと、変わらない格好をしている。
艶やかな長い黒髪を三つ編みにして前に垂らし、死覇装の上に、ふわりと隊首羽織をまとっている。
いつもとただ一つ違うのは、いつも副隊長の虎徹に持たせている斬魂刀を、手に携えていることだった。

「な……なんだ、脅かしやがって。四番隊じゃねーか」
医療専門部隊の四番隊を、普段から舐めてかかっている十一番隊士達は、ヘッと笑いを漏らす。
「年は食ってるが女だ！俺が血ィもらった！！」
日番谷が、そっ、とさらに卯ノ花から離れた。
「隊長！行かないなら俺達がもらっち……あれ？」
飛び下がった更木以下隊長格を見て、隊士たちがキョトン、とする。

卯ノ花がさりげない動きで、刀の柄に手をやる。
そして、音も無くスッと抜き放ち、白銀の光がこぼれた。

その刃の切っ先を、地面に垂直に向ける。
とっさにその場の全員が反応できないほど、その一連の動きは自然だった。
「……月下水鳴」
まるで詩を詠むような穏やかな声。
しかし……短い言葉を言い終わると同時に、刀が発光した。
その刀身の中ほどの位置から刀を中心として、水紋のような光が波状に広がるのが見えた。
それはほんの刹那の間に、周囲に輪のように広がった。

チッ、と音を立てて、日番谷の逆立てた髪に、その水紋の外輪部分が掠った。
――　はっ？
パラパラ、と髪の何本かが散り落ちる。
これは……霊圧でできた「刃」だ。しかも、途方も無く鋭い。
それを把握すると同時に、
「逃げろっ！！」
とっさに日番谷は叫んでいた。

しかし、その言葉もむなしく、その恐ろしく巨大な「刃」は、地面から１５０センチほどの高さで水平に迫った。
「うぉぉっ！」
避け切れなかった十一番隊の隊士たちが、胸ほどの高さにその一撃を喰らい、弾けとんだ。
「あぶねっ！！」
さすがに副隊長格以上と一角と弓親は、その場から飛び離れる。

スッ、と軽やかな足取りで、卯ノ花が一歩踏み出した。
意識の有る十一番隊の者たちは、一気に後ろに下がる。
あの戦い好きな隊士たちを一瞬でひるませるとは……日番谷は別の意味で感動した。

穏やかな水の綾のように見えながら、触れればこの威力。
卯ノ花らしい攻撃だ、と内心で頷く。
――　だから、コイツとは組みたくないんだ……
日番谷の嘆きを知ってか知らずか、卯ノ花は艶やかに微笑んだ。
「悪霊退散」
「悪霊って、死神だぞコイツらは！」
「もちろん、存じておりますわ」
至極当然な日番谷の突込みにも、卯ノ花は動じない。
スッ、と人差し指を屋敷の奥へと向けた。

「姫はあちらのようです。ひとまず、助け出してくださいな。
この人達はその後でゆっくり」
その後でゆっくり、なんだというのだろう。
しかし、それは断じて尋ねるまいと思う日番谷なのだった。

Ｇｏｎｇ１２　そして役者は出揃った

そのころと、ほぼ同じくして。
バンパイア屋敷の前に、一組の男女が現れた。
バサッ、と死覇装が風に煽られてはためく。
「また、帰ってきちまったな、ここに」
一護が肩をけだるげに回し、バンパイア屋敷を眺め回した。
「あぁ……」
ルキアがそれに、生真面目に頷く。
前回は慌てていたから、バンパイア屋敷の外観などマトモに見ていなかった。
しかし、改めてみてみると、「いかにも」な幽霊屋敷である。

「よし行くか！」
一護が巨大な斬魂刀を肩に担ぎ、どすどすと屋敷の門をくぐろうとする。
「たわけが！」
その後頭部を、すかさずルキアが殴った。
「てーな！何しやがる！」
振り返った一護の前に、ルキアがズイと身を進める。
「うかつに踏み込むな！十一番隊や、恋次達でさえ戻ってこないのだからな」
「分かって……うぉっ！？」
ズウゥゥン、と地響きのような音が響き、地面が地震のように揺れる。

「な……なんだこの凶悪な霊圧は！」
門に掴まった一護とルキアは、思わず顔を見合わせた。
一護ですらクッキリと感じる強い霊圧が、急速に屋敷内を制圧しつ

つある。
「どういうことだ！前に入ったときも、これほど性質（タチ）の悪い霊圧ではなかったぞ？」
王家の姫に力を借りたバンパイア達の攻撃は、強力ではあったものの、こんな性質ではなかったはずだ。
狼狽するルキアの隣で、一護が立ち上がった。
「とにかく、入ってみなきゃ状況は分からねーよ。行くぞ、ルキア！」
「あぁ！」
確かに。ここにいて霊圧を探っていたところで始まりそうに無い。
ルキアは大股で玄関に向かう、一護の背中を追った。

そして、まさに同じ時。
「んっ……揺れが収まった！お前ら、落ちてねーか！」
バンパイア屋敷の壁にへばりついていたジン太が、背後を振り返った。
「うん！大丈夫」
「なんとか」
返したのは、遊子、ウルル。遊子を支えているのは夏梨だった。

「どこなんだよ、眠り姫がいたのは！」
ジン太は、元は青だったと分かる程度に色がはげた屋根から、三人を見返した。
そして、慎重に足を進める。何しろ、苔がはびこっているために、気をつけないと滑るのだ。
「あっちだ！あの……ステンドグラスが見えるところ！」
窓枠に掴まって身を乗り出した夏梨が、中庭のほうを指差した。
そこにひときわ高い、塔のようなものが見える。
その塔の天辺には錆びた風見鶏が取り付けられ、吹きぬける風に嫌

な音を立てていた。

「ねぇ。引き返そうよぅ……死神さんたち、本気で戦ってるよ」
ウルルが身をすくめる。
なまじ自分の霊圧が高いから、中の戦いの様子も手に取るように感じられるらしい。
しかし、同じように霊圧を感じているはずのジン太は、ハッと笑い飛ばした。
「大丈夫だって。それより、姫だぜ！姫を助け出すのは男のロマンだろうがよ！！」
ジン太は逸っていた。
日番谷でさえ顔色を変えるほど、高貴な出自の姫。
それを、日番谷よりも先に、自分が助け出すのだ。

それを聞いたウルルが、ますます眉をへの字に曲げた。
「じゃぁ、ジン太君一人で行ってきてよぅ。あたし達、男じゃないし」
うっ、とジン太が言葉につまり、後ろの3人を見渡した。確かに、自分以外は全員女だ。
「い、いーだろうよ！俺一人で行って……のわっ！？」
バンパイア屋敷の内側で光が明滅し、またドーン、と建物全体が揺れる。
よろめいたジン太の袖を、後ろから来た夏梨が捕まえた。

「一度やってみたかったんだよな、姫を救うって！！」
ジン太に負けず意気揚々と、夏梨が足を踏み出した。
どうやら、頭のその辺の構造はジン太と同じらしい。
「あたし、お姫様写真に撮りたい！」
その後ろに、携帯をポケットに入れた遊子が続く。
「見つかったら、怒られちゃうよ……」

ウルルは辺りをきょろきょろと見回し、他の三人が先に行ってしまったのを見ると、ため息をついてその後を追いかけた。

「な、んだぁ？こりゃ」
ロビーの中に一歩足を踏み入れた一護は、その光景に絶句した。
広々としたロビーのあちこちは焼け焦げており、焦げ臭い匂いが周囲に漂っている。
階段は途中から打ち壊され、馬鹿でかい刃物でも食い込んだような跡が見える。
「お！おい！！」
ルキアが一護の脇から飛び出し、その場に累々と横たわった死神たちの一人を抱き起こした。

「この者、十一番隊の……」
間違いない。数日前、浦原商店に乗り込んできたとき、更木と一緒にいた隊士だ。
その胸の辺りに一直線に、何かが食い込んだような跡が見て取れる。
よほど痛かったのか、顔はゆがみ、口からは泡を吹いていた。
全身は埃に覆われ、体のあちこちを負傷しているのが見て分かった。

「おい、しっかりしろ！」
ルキアが肩を掴み、うめき声を漏らしているその男を、何度か揺すった。
「どうしたのだ。一体誰にやられた？」
「ひ、ひでぇ……もうカンベンしてくれって言ったのに」
うっすらと目を開き、男が口を開く。
「誰だ。バンパイアにやられたのか？」
「お、お、お母さんに……うっ！！」

その言葉を最後に、がっくりと男は首を落とした。

「……お母さん？」

一護とルキアは、微妙な表情を見合わせた。

「お母さんなんていたっけか？」

「答えようも無い質問をするな。それにしても」

ルキアは、ひどい有様のその男をそっと床に横たわらせると、唸った。

無理もない、と一護も思う。

戦いが三度のメシよりも好きな十一番隊をして、「カンベンしてくれ」といわせるほどの敵は一体何者なのか。

その者は、よほど極悪非道に違いない。

「！見ろよ、ルキア！」

一護が何かに気づき、気を失った男の口元を指さした。

凝視したルキアが、怪訝そうに眉をひそめる。

「この犬歯……もしや」

「多分、そのまさかだぜ。コイツも、ここに倒れてるコイツもそうだ」

一通り目に映る何人かを見たが、全員その口元に、見覚えの無い巨大な牙が見て取れた。

「まー、そんな気はしてたけどよ。やっぱりバンパイアになってたか」

一護がため息をついて、立ち上がった。

十一番隊の誰も戻ってこなかったとき、既にその可能性は濃厚にあったのだ。

戦いは筋肉で制する十一番隊にとって、バンパイアを倒すことは難しくは無いはずだ。

しかし……噛み付かれたら最後、自分にもバンパイアが「感染する」

ことを知っていたかどうか。
大体、知っていたとしても、それを考慮して距離をとって戦うなど、きっとしないのだコイツらは。
「と、すると……こいつらを倒したのは、恋次たちか？」
「だとしたら、更木隊長には勝てん！」
ルキアが、バッと立ち上がる。
「一護お前、更木隊長を押さえられるか？」
「え？そりゃまぁお前……」
カンベンしてくれよ。そういう前に、
「行くぞ！あちらで強大な霊圧を感じる！」
ルキアは一護の袖を掴むと、全力で走り出した。

Ｇｏｎｇ１３　戦うお母さん（後編）

そのころ。
「おおおお重い！やめてください、卯ノ花隊長っ！！」
屋敷の奥の方では、恋次が、あられもない悲鳴を上げていた。
仰向けに倒れたその背には、巨大なエイに似た生物……卯ノ花の斬魂刀の化身、肉雫接（みなづき）がのしかかっていた。
そのサイズは５メートルほど。見た目も実際も、息が出来ないほどに重い。

――　お、俺が何したってんだ！
ただ、戻らない十一番隊のために出向いただけじゃないか。
なのに何が悲しくて、本来治療班の元締めによって、こんな目に合わなくてはいけないのか。

ウフフ、と微笑んでいる卯ノ花に、恋次は全力で訴えを試みた。
肩から下は押さえ込まれているため、手をバンバン叩くくらいしかすることはないが。
「アンタ、四番隊の隊長でしょう！こんなことして、あとで治療しなきゃいけないのも……」
「誰が治すのですか？」
サラリ、と卯ノ花は言い放った。
誰がって。
恋次は凍りつく。
ひょっとして、やるだけやって治す気はまるでないとか？
恋次は心中震え上がりながら、傍に積み上げられた一角と弓親、吉良の（死）体を見やった。
「ちょっ、冗談じゃない……、て、潰されてる俺潰されてる！」
悲鳴を最後に、ぐしゃ、その体が肉雫接の下に完全に隠れた。

「おーおー……」
傍においてあったアンティークな猫足のテーブルに、更木が腰を下ろした。
ビシッ、と音を立てて、華奢な猫足にヒビが入る。
部下達の惨状を見て、更木にしては珍しい、非常に微妙な表情を浮かべていた。
「戦われますか？」
にっこり、と卯ノ花が笑顔を浮かべる。
行動と言葉がこれほどあってない人間は珍しい。

「戦ってもな。あんまり面白そうじゃねえなぁ」
更木は、さらに珍しくもぼやいた。
そして、ちらり、と視線をドアの近くに走らせる。
「てめーを人質にしてもムダか？」
無造作に刀を引き抜き、ひゅっ、と佇む少年の喉元に向けた。
腕を組んだ日番谷が、無関心そうに、自分に向けられた切っ先を流し見た。
そして、ノコギリのように欠けた刀身を無造作に指先で掴むと、スイ、と自分から避ける。
「隊長が、隊長との戦いを避けるために隊長を人質にすんのか？」
バカバカしい、とその目が言っている。
ただ、その目つきにはわずかに、同情の色も見て取れた。

戦いを避けるなんて、なんて更木らしくない行動だろう。
それほど、目の前のこの女と戦うのが嫌だということだ。
日番谷にはその気持ちは、痛いほどわかったが。

「俺に『避けててくださいね♪』とでも言うのが関の山だと思うぜ」

そう日番谷が言い、ふたりして歩み寄ってくる卯ノ花に目を向けた。
卯ノ花はにっこり笑って、日番谷を見た。
「香典は弾んでおきますわ」
余計、悪かった。

突っ込みどころがありすぎて絶句している二人の男を、卯ノ花は涼しげに見やる。
「そういえば、日番谷隊長」
「……はぃ」
日番谷が我知らず、一歩下がる。
正直、更木に切っ先を突きつけられるよりも、卯ノ花に矛先を向けられるほうがよっぽど怖い。
――　どうするか……
姫を助けろ、とは言われている。
でもその前に、仲間である死神たちのほうがよっぽど救助の必要がある、と思い、動くに動けずにいたのだ。
そんな日番谷の心境を知ってか知らずか、卯ノ花は笑みを深くした。
「どうせ、そこにおられるならと思って。あなたのお友達は残しておきましたよ」
「へ？」

そーっ、と日番谷が背後を振り返る。
でも、そのときには分かっていた。
だいたい、そいつが卯ノ花の毒牙にかかるのがさすがに見ていられなくて、ここから離れられなかったのだから。
「シーロちゃん☆」
しかし当人は、そんな日番谷の気遣いなど気づくはずが無い。
基本的に雛森は、自分に向けられる好意に気づく能力が、恐ろしく低いのだ。
「雛森……てめー、痛い目に合いたくなかったら、大人しくしとけ」

日番谷は振り返り、ドアをくぐって現れた雛森を見返した。
あのドアをくぐれば、この広大な屋敷の中心部……姫を目撃した教会の近道だ。

「ちょっとそこに立っててね」
写真撮るから、とでも言いそうな気軽さで、雛森は日番谷に手を振った。
にっこりと笑いながらも、その口からはみ出している犬歯が非常に怖い。
廊下からドアまで、二人の距離は三メートル程度。
「て、出来るかぁ！」
日番谷はとっさに身を翻すと同時に、瞬歩を使いその場から掻き消える。
「あっ！！」
雛森が横に手を伸ばすが、間に合わない。
雛森が振り向いたときには、日番谷は雛森の横をすり抜け、ドアから廊下へと飛び出していた。

Ｇｏｎｇ１４　日番谷と雛森の脱力系の戦い

――　とにかく、教会に行くか！
一体、どうやったらバンパイアから解放されるのか。
それがさっぱり分からない今、とにかく姫を助け出すしかない。
そう思った日番谷が、廊下の窓から見える教会に目を遣った時、
「コラ！逃げないでよ！！」
日番谷の眼前に、瞬歩で雛森が現れた。

「ぅおっ！！」
とっさに体勢を低くし、伸ばしてきた雛森の手をすり抜けると同時に、瞬歩を使う。
ふっ、と中庭に姿を現す。
――　そうか、あいつも霊圧は高いんだったな……
厄介だな、と日番谷は舌を打つ。
霊圧を大量に消費する瞬歩を、実戦に取り込める死神は、実はそう多くは無い。
霊圧のキャパシティが限られている以上、瞬歩を多用しすぎると、他の鬼道などが使えなくなるからだ。
ただ、日番谷のようにキャパシティが極めて高い者にとっては、瞬歩の多用はさほど気にならない。
が……

「逃がさないわよ！」
雛森の手が、日番谷の袖を掠めた。
霊圧の高さで言えば、日番谷には及ばなくても、鬼道の達人と呼ばれた雛森も相当なものだ。
「てめーと戦いなんて、やってられるか！」
「そんなんだから、身長が伸びないのよ！」

「関係ねぇだろ！！」
くわっ、と振り返った日番谷の眼前に、雛森の手が伸びた。
過たず、その手は日番谷の額に垂らした前髪を掴む。
「い！痛ぇ痛ぇ！放せ！！」
「引っこ抜いちゃうわよ！止まりなさ……きゃぁっ！？」
雛森が、素っ頓狂な悲鳴を上げて、日番谷から離れた。

「ひっどぉぉい！！何よそれ！！」
「髪の毛を引っ張られる」というかなり珍しい攻撃が堪えたか、日番谷は若干涙目になっている。
そして、その右手に赤いスプレーのようなものを持ち、雛森に向けていた。
「これはな」
日番谷は、そのスプレーの注意書きを見やった。
「蚊用の殺虫剤。近くの薬局で、２本まとめて５９８円で買った」
「さすが吉良君より経済感覚があるわね」
「おまけに実用的だ」
「何が実用的よ！」
「実用的だろ」
日番谷が、イタズラっぽい笑みを浮かべて、スプレーを雛森に向けた。
――　こっ、こいつ……
義理の姉ともいえる自分に、殺虫剤向けるなんて（※よいこもわるいこもマネしてはいけません）。
護廷十三隊の隊長の戦い方とも思えない嘆かわしさだ。
自分を棚にあげて雛森は唇をかみ締める。

日番谷は、雛森の手を振り払い、ひょい、と教会の屋根の上に飛び移った。
そのまま飛び降りると、数日前自分自身が侵入した、窓に着地した。

「てめーはそこで大人しくしてろ」
そう言って、中にふっと姿をくらませた。
「待ちなさいよ！」
慌てて日番谷の後を追った雛森が、屋根の上を見渡して、ふと足を止めた。
「あれは……？」
屋根の上から、教会の中の様子を伺っている子供が、４人ほど見えた。
現世の子供にしては、全員霊圧の水準が異様に高い。雛森が怪訝そうに眉根を寄せたとき、
「ひ……雛森副隊長っ！？」
ひどく驚いた声に、雛森はハッと振り返った。

振り返った視線の先には、真央霊術院で同期だった、朽木ルキアの姿が見えた。
そして、その後ろからこちらにやってくる、オレンジ色の髪をした少年も。
――　あれが、黒崎一護っていう旅禍？
雛森は、瀞霊廷に侵入したという旅禍を、最後まで目にしていなかった。
――　この霊圧。
黒崎一護とやらの強大な霊圧に驚いたのが、ひとつ。
しかし、同時に別のことも見抜いていた。
「今、そこの屋根の上にいる女の子、貴方の妹じゃない？霊圧が似てるわ」
「……へ？」
一護は、心の底から意外そうな顔をした。そして、雛森が指差したほうを見やって、
「あぁ？」
今度こそ仰天した声を上げた。

トン、と軽い足音を立て、日番谷は姫が眠る台座の上に、飛び降りた。
その亜麻色の波打つ髪をそっ、と手で避けようとして、その手が止まる。
――　柔らかい……
日番谷の硬い髪とは全く別のもののように、その髪はふわりと日番谷の指の中で形を変えた。
眠り続ける姫の頬は陶器のように白く、その桜色の口元は、わずかに笑みを浮かべているように見えた。

我知らず、息を詰めていたらしい。
ほぅ、と息を吐き出して、日番谷はガラにもなく動揺した。
――　なんだ？俺、今何考えてた？
とにかく、この姫を連れ出してしまわなければ。
でも、この柔らかそうな生き物の、どこをどう持ち上げたらいいものか分からない。
日番谷が躊躇った時、
「あ！！おいこら、てめえ！」
聞きなれた声が響き、日番谷は泡を食った表情で振り返った。

「お前、なんでここにいる！」
「そりゃこっちの台詞だ、先越しやがって！」
見慣れたジン太の声を聞いて、なんとなくホッとしたのは初めてだったかもしれない。
だが、その後ろに遊子や夏梨、ウルルの姿まで見えたのは、一体どういうことだ。
「ここは危ねぇんだ、下がれ！」
日番谷が台座の上で立ち上がった時だった。
「あれ？」

身を乗り出して、携帯を構えていた遊子の体が、ぐらりと前に倒れた。
というよりも、足元の窓枠ごと、崩れ落ちたのだ。

「遊子！」
ジン太が手を伸ばすが、間に合わない。
「危ねぇ！」
次の瞬間、横から飛び出してきたのは、一護だった。
教会の中に落ち込もうとしたその手首を掴むと、一気に屋根の上に引き戻した。
「お！お兄ちゃん！」
「ここは危ねぇんだ、外に出てろ！」

外で、妹たちを叱り飛ばす一護の声が聞こえた。
台座の上に立ち上がった日番谷が、ホッと息をついた時だった。
「シーロちゃん♪」
ギクリ、と日番谷が体の動きを止めた。
その肩に、細い指が置かれ……振り返った日番谷は、くぐもった悲鳴を上げた。

「とにかく、おめーらはここにいろ。とりあえず姫をこの場所から連れ出すから」
一護はそういい残すと、窓枠に手をかけ、中を覗き込んだ。
「おーい、冬獅郎！その姫頼むぜ！」
「……あぁ」
雛森の隣に立つ日番谷の体が、ゆらり、とゆれる。
それを見た一護が眉をひそめた。
「どーした、具合でも悪いのか？」
「具合？」

雛森と日番谷が、同時に顔を上げた。
「あァ、気にすんな。ちょっとハラが減っただけだ」
その二人の姿を見た全員が、ぎょっと目を剥いた。
二人の口元からは、お揃いのように、長い牙がはみ出していた。

Gong15 2 on 2

「ど、どーするよ、ルキア」
「どうすると言っても……」
そこまで言って、顔を見合わせた一護とルキアが絶句する。
一護とルキア。日番谷と雛森。
この2組が秤に乗った場合、どちらが重いのか分からないが、どちらにせよ逼迫しているのは確かだ。
「と、とーしろう君？」
「血ィ寄越せ」
バンパイアになってしまえば、脳みそも切り替わるのだろうか。
カチ、と刀の鯉口を切った日番谷に、全く迷いは感じられない。
「お、お待ちください日番谷隊長！バンパイアになって死神を襲ってしまったら、
書かなければならない書類が何十枚も増えますよ！？」
ピクリ、と日番谷のこめかみが痙攣（けいれん）するように震えた。
「うまいぞルキア！葛藤してる！」
刀の柄を握った手の力が、迷ったかのように緩むのが遠目でもわかった。

うーん、と雛森がうなり、考えている日番谷を見下ろした。
「でも、このままバンパイアでいたほうが、書類は書かなくていいよ？」
ぽん、と日番谷が、答えを見出したかのように掌を打った。
「でも、そう考えると、邪魔な人たちがいるんだよね」
「だよな」
雛森と日番谷の瞳が、まるで獲物を見つけた猫科の生き物のように不穏に輝く。
「いやいや、待て待て！」

一護が慌てて手を振ったが、もはや耳に入っていないだろう。
日番谷と雛森が、同時に掌を前にやった。
「鬼道が来るぞ！逃げろ！」
それを見止めたルキアが、慌てた素振りで一護の袖を掴んだ。
二人とも、瀞霊廷では一・二を争うほどの鬼道の達人なのだ。
本気で撃たれたら、命に関わる。
「マジかよ！！」
日番谷と雛森の霊圧が急激に高まるのを感じ、一護の顔が引きつった。
ヤバイ、と思った瞬間、二人の声が重なった。
「赤火砲！！」
「氷雨！！」

「くっ！」
一護はとっさにルキアの前に出て、斬魂刀をかざした。
「馬鹿者！」
自分を庇おうとした一護に気づいたルキアが、慌てて鬼道を唱えようとした。
間に合わないと知りながらも、結界でも張るつもりだったのかもしれない。
しかし……
必ず来るはずの衝撃は、いつまでたっても二人を襲っては来なかった。

「はい？」
目をつぶっていた一護が、ゆっくりと片目を開けて、目の前の風景を見やった。
どこもやられていないし、どこも傷つきさえしていない。
目の前では……日番谷と雛森が、「？」を顔に書いたような顔をし

て突っ立っていた。

ややおいて、

「お前、雛森！邪魔すんじゃねー！」

「日番谷くんこそ、あたしの邪魔しないでよ！消えちゃったじゃない！」

いがみ合う二人を、一護とルキアはあっけに取られて見守った。

「――　そうか」

ルキアが、ぽん、と手を打った。

「日番谷隊長は氷雪系。雛森副隊長は炎熱系。互いの力を相殺したのか」

炎熱系の赤火砲と氷雪系の氷雨は、威力で言うと同じようなものだ。どうやら、放った威力とタイミングが全く同じだったため、互いの力をかき消してしまったらしい。

「勝算がでてきたぞ」

ルキアは、腰に帯びた斬魂刀を引き抜いた。

そして、前に立つ一護に、小声で囁いた。

「この二人、技の相性は最悪だ！とにかく、日番谷隊長を先に抑えるぞ」

「それはいいけどよ」

一護もひそひそと返す。そして、目の前の二人を指差した。

「何やってんだ、あいつら」

「ジャンケンホイ！」

ルキアの視線の先で、互いに身を寄せ合って、こっそりじゃんけんしている二人の姿が目に入った。

どっちが勝ったのか分からないが、うんうん、と何やらうなずき合っている。

「やばい、何だかわからねーけど、手を打とうとしてるぞ」
一護がそういったとき、雛森がくるりと振り向いた。
振り向きざまに、腰の斬魂刀を引き抜く。
その一連の流れの滑らかさは、さすが戦いの場数が違っている。

「弾け、飛梅！」
凛とした声がその場を貫く。
それと同時に、紅蓮の火の玉がいくつも生み出され、一護とルキアを襲った。

「ちっくしょー。やるしかねーぞ！」
バッ、と攻撃を避け、一護がルキアを見やった。
「一護！前！！」
しかし、ルキアの声に慌てて前方を見やる。

シャッ！
鞘ずれの音が走った。

紅蓮の炎を撒き散らし、一護に向かって真っ向から突っ込んできたのは、日番谷だった。
白銀の刃が、神速で一護に向かって振り下ろされる。
「ぐっ！！」
一護が、とっさに前にかざした斬魂刀で、その攻撃を受け止める。
「こいつ……！」
ビリビリと刀身が震え、踏ん張った一護の足が背後にずり下がった。
この夏梨や遊子よりも小さな体のどこに、これほどの爆発的な力が潜んでいるのだ。
そう思うくらい、押し込む力は強かった。

「加勢するぞ、一護！」

押される一護を見て、ルキアが駆け寄った。
――　とにかく、日番谷隊長の動きを止める！
口の中で鬼道を唱えながら、日番谷に向かってまっすぐに駆けた。
雛森一人なら、一護とルキアなら止められる。
「六杖光牢！」
チラリ、と日番谷がルキアの手から走った光芒を一瞥した。
六本の光の柱が、日番谷の体を中心に迫る。
――　やったか？
ルキアがそう思った時。日番谷が氷輪丸を一閃させた。

「甘ぇっ！！」
ガキン！！
裂帛の気合と共に、六本の柱が、刃に砕かれ、崩れ落ちた。

「なに？」
霊圧そのもので出来た六杖光牢を、物理的に斬ることはできないはずだ。
とすれば、同じく霊圧をぶつけることで、それを掻き消したというのか？
あの一瞬でそれをやってのけるとは、恐ろしい戦いのセンスだった。

ルキアが次の鬼道を撃とうと立ち止まった時だった。
日番谷の前に、ザッと雛森が立ちふさがった。
その斬魂刀に赤い光が宿っているのを見て、ルキアは慌てて斬魂刀「袖白雪」を引き抜く。
「火炎弾！」
「白蓮！！」
炎と氷が真っ向から打ち合う。
視界が一気に、水蒸気で何も見えなくなる。

「くそ……」

目を凝らしたルキアの袖に、ボッ、と炎が燃えついた。

Gong16　一護　対　日番谷

「ルキア！」
床に転がったルキアを見て、一護が駆け寄った。
体のあちこちに燃えついた炎を、床に転がって掻き消したルキアは、何とか起き直った。
「大丈夫か！」
「馬鹿者、相手から目を逸らすな！」
半身を起こしたルキアが叫ぶ。
しかし、そのときにはもう遅かった。
二人に迫った日番谷と雛森が、同時に鬼道を唱える。
「赤火砲！！」
息はぴったりだった。爆発的な炎が、一護とルキアを真正面から襲う。

まずい！
迫り来る熱気にも関わらず、ルキアの背筋が粟立つ。
「ぐっ！！」
避けられるはずもない距離だった。
斬魂刀で受けたものの、一護とルキアの体が、もんどりうって床に倒れる。

「止めだ！」
容赦なく、二人が一護とルキアに迫る。
――　甘く見ていたか……
全く性質の違う力の達人として、戦いの相性は悪いと思っていたが、とんでもないマチガイだ。
鬼道の達人であるということは、互いに異なる性質の技も問題なく使えるということなのに。

とにかく、この場から離れなければ。
立ち上がろうとしたルキアの半身が、ガクン、と床に崩れた。
「ルキア！」
歯を食いしばる。どうやら、さっきの攻撃で足をやられたらしい。
「一護、逃げろ！」

バンパイア化した二人には、自分達と戦うことに躊躇いはない。
そして、戦いの経験値も二人のほうが桁外れに上だ。
2対2でこれ以上戦っても、こちらに勝ち目はない。
それなら一護だけでも逃げ、この事態を瀞霊廷に伝えなければ。

そう思った時だった。
ルキアの前にしゃがみこんだ一護が、ぐっ、と唇をかみ締めた。
そして、斬魂刀を二人に向ける。
「天鎖斬月！！」
「一護っ！」
ルキアが驚きの混じった声を上げる。
強大な霊圧の刃が、至近距離から日番谷と雛森に迫った。

「っ！？」
日番谷が、とっさの動きで雛森を突き飛ばす。
そして、二人が避けた間を、天鎖斬月が通り抜けた。

ドォン！！
その衝撃に、家中が悲鳴を上げる。
教会の中は、もうもうとした煙に包まれた。
煙の向こうに、無残にもぽっかりと崩れ落ちた壁が見えた。

「馬鹿者、一護！　そんな危険な技を……！」
ルキアは一護に駆け寄り、その袖の部分を掴む。
いくら日番谷と雛森といっても、月牙天衝をまともに受ければ軽傷では済むまい。
「時間がねぇんだっ！！」
一護は、ルキアを見返して怒鳴った。その剣幕に押されたルキアが、黙って一護を見上げる。

「もうじき、王廷のヤツが来るかもしれねーんだろ？　その時までに決着をつけねーと、ますます事態がややこしくなんだろ！」
「そ、それは」
ルキアがとっさに口ごもる。一護の言葉が、事実だったからだ。
死神代行に心配されるのも情けないが、確かに助けに向かった死神がバンパイア化し、王廷の刺客を襲ったりしたら洒落にならない。
「コイツらは、俺が止める」
「……しょうがないな」
ルキアは頷いた。
そしてスゥ、と一度息を吸い込む。平常心が、急速に戻ってきていた。
格上の仲間に攻撃される、という事態に、自分でも気づかぬうちに軽くパニックになっていたらしい。

「……」
日番谷は、崩れ落ちた壁面をしばし沈黙して見やった。
「下がれ、雛森」
そして、刀を手に一歩前に出る。
「そっちも、朽木は手を出すな。俺と黒崎でケリをつける。それで

どうだ」
「おぅ！」
ルキアの返事を待たず、一護は力強くうなずくと、自分も前に出た。

――　どうする……
ルキアは、固唾を呑んで、向き合う一護と日番谷を見つめた。
そっ、と足に手をやり、治癒系の鬼道を唱える。しかし、戦えるまでには時間がかかりそうだ。
ルキアがこんな状態な以上、一騎打ちを申し出た日番谷の提案はありがたい。
しかし、たった一撃で日番谷にその判断を強いた、一護こそ驚異なのかもしれない。

戦いを、止めたい。
しかし、もう止められないことは明らかだった。
そして、二人の実力は霊圧を見る限り、伯仲している。
ちょっと血を見る程度では、もはや収まりそうに無かった。

日番谷と一護が、互いを睨みすえながら、一歩、また一歩、と移動する。
互いを喰らおうとする肉食獣同士が、攻撃の様子を伺っているのを思い起こさせる。
躍動するときを待っている筋肉が、固く張り詰める。

日番谷の斬魂刀「氷輪丸」が、青白い光を浴びる。ハッ、と一護とルキアの表情が硬直した。
「霜天に……」
そこまで言いかけて、ふと言葉を止めた。そして、視線を教会の窓に走らせる。正確には、窓枠から戦いの様子をのぞいているジン太やウルル、夏梨と遊子に。しかしその視線は、すぐに逸らされた。
「……アイツ」
刀を正眼に構えなおした日番谷を見て、ジン太が眉をひそめた。
「氷輪丸は、その性質上周囲のものを巻き込む。……おぬしらを気遣う心は残っておられるのだな」
ルキアが、ふっと4人の傍に瞬歩で現れた。
「しかし、このまま戦いが進めば、おぬしらとてタダでは済まぬだろう。離れておれ」
「でも……」
夏梨は、必死の表情で眼下の一護と日番谷の姿を見下ろした。

――　氷輪丸を使わねぇなら、勝てるか……？
一護は、油断無く斬月を構えながら、日番谷を見据えた。一護は、もともと刀での斬り合いは得意だが、鬼道は全く使えない。よって、鬼道系の斬魂刀……まさに氷輪丸のような力は鬼門なのだ。
素早さは勝てないかもしれないが、純粋に力の勝負なら体格から見て自分が上。
「行くぜ！」
とにかく、相手の動きを封じる。一護は右手で斬月を振りかぶり、日番谷に向かって一直線に駆けた。

「馬鹿者！　正面から突っ込むな！」
ルキアの叱責が飛ぶ。日番谷が、その大きな瞳をスッと細めた。

「脇が甘ぇ」
全くその声に動揺は感じられない。自分の身長の三分の二はある氷輪丸を軽々と扱うと、一護の左脇から一気に斬りつけた。
「一兄！」
夏梨の叫びと、遊子の悲鳴が響き渡り、血しぶきが散った。

「てめぇ……」
眼を見開いたのは、日番谷。一護は氷輪丸の鍔元を握り締め、その動きを止めていた。当然、鍔元といえど刃物である。一護の掌から腕に、血が滴った。
「いたく……ねー！！」
怒鳴ると同時に、力任せに日番谷の手から氷輪丸を奪い取ると、背後に放り投げた。
痛くないわけがないが、痛いなんて言っていられない。
日番谷の動きを封じるのに、それくらいしか思いつかなかったのだ。

刀を失った日番谷が、鞘に手をやると同時に背後に跳び下がる。
「逃がさねぇ！」
間髪入れず一護が追い、頭上から構えていた斬月を振り下ろした。
鈍い音が響き渡り、日番谷は頭上で、斬月を鞘を使って受け止めた。

「くっ……」
一護の上から押し込む力に、日番谷の口から苦悶の声が漏れた。当然だ、圧倒的な体格差に加え、力の差はいかんともしがたい。
「日番谷くん！」
「手ェだすな、雛森！」
「おとなしくしろ、冬獅郎！　俺の勝ちだ！」

しかしそこで一護が失念していたのは、日番谷がおそろしく負けず嫌いだ、という事実だった。
雛森と一護の声が、その負けず嫌いに拍車をかけただけだということも。

ぎり、と日番谷が歯を食いしばった。見下ろした一護の眼に、日番谷の体の輪郭がブレたように見えた。
――　なんだ？
日番谷の全身から、青白い光が放たれた。一護が眼を見張った瞬間、全身に強い衝撃が奔った。
体が痺れたと思った時には、一護の体は、まるで車にでも撥ね飛ばされたかのように背後に吹っ飛ばされていた。

「一護っ！」
教壇に背中を打ちつけ、破壊された机と共に転がった一護を見て、ルキアが声を上げる。
その衝撃により起こった風が、姫の眠っている棺にも届く。
けぶるような亜麻色の髪が、生き物のように揺れた。

「この、馬鹿力が……」
毒づいた日番谷が、両腕をさすっていた。
「俺が馬鹿力なら、お前はバケモン、だろうが」
ごほっ、と咳き込んだ一護が、斬月を支えに立ち上がった。斬月が白く光る。
見てみれば、それは刀身に張り付いた氷だった。

常なら穏やかな翡翠色である日番谷の瞳は、今は青白く爛々と輝いていた。
日番谷の全身が霞んで見えるほどの霊圧が、その体を覆っている。近づくだけで吹っ飛ばされるほどの力……これでは、まともに近づくこともできない。

「そろそろ、本気でやるか？」
前に出た日番谷が、床に転がっていた氷輪丸をひょい、と足で蹴り上げる。そして柄を手でつかみとった。
「そうするしかなさそうだな」
一護が、斬月を構えた。
「死んでも怨むなよ。黒崎一護」
「……お前もな」
一護も、ここまで来ると本気でやるしかない、と観念した。
日番谷と、一護がにらみ合う。
そして、刀を共に構えた時……

「やめろよっ！　一兄、冬獅郎！！」
窓枠から、夏梨が身をおどらせた。数メートル下の、姫の眠る棺の上に、器用に飛び降りる。床に下りようとした時、
「動くな夏梨！」
飛んできた兄のかつてないほどに鋭い声に、夏梨の肩がビクリと動いた。
「冬獅郎を殺すのかよ！」
「そんな気あるわけねぇだろ！　でも」
手を抜けば、殺される。ゆっくりと歩いてくる日番谷を見て、一護は刀を構えた。

「冬……」
真下にやってきた日番谷に夏梨が声をかけ、床に飛び降りようとした時だった。
日番谷が、夏梨に刀の切っ先を突きつけた。
その刃の向こうにある翡翠色の厳しさに、夏梨は息を飲んだまま、動けなくなる。
「そこから降りるんじゃねえ。それ以上近づいたら、安全は保証しねぇ」
「冬獅郎……」
夏梨の瞳に、驚いたためとも、悔しいためとも言えない涙がたまってゆく。
日番谷の心には、仲間を思いやる気持が残っている。それでも、止められないのか。

しかしその光景は、一護の心に火をつけるのに十分なものだった。
「夏梨に手ェ出すんじゃねえ！」
裂帛の気合に、日番谷が振り向く。その時には、眼前に斬月の刃が迫っていた。
斬られる。
日番谷の背筋に、寒気が奔った。

「やめて！！」
夏梨が叫んだ瞬間、瞳にたまった涙が頬を伝い落ちた。その涙は、天を向いていた姫の掌に、落ちる。
「霜天に座せ、氷輪丸！」
日番谷が反射的に始解する。その時、夏梨の顔のすぐ後ろで、鈴を振るような声が響いた。

「おやめなさい」

Gong17.　そして天使が舞い降りた

夏梨は、ゆっくりと振り返る。
振り返ると丁度目の前に、明るい碧色(みどり)の輝きがあった。
吸い込まれそうに大きな瞳。その中には、どこまでも澄んだ湖面のように美しい碧が湛えられていた。碧を彩る亜麻色の睫(まつげ)が瞬くのを、夏梨は夢でも見ているような気持で見返した。
「あ、あなた、は」
花の蜜を含んでいるかのような、微笑を浮かべた口元。それが、ふわりとほころんだ。
「わたくしは、恵蓮(エレン)。緋鹿恵蓮と申します」

日番谷も、一護も、突然目覚めた王族の姫君を、ただ見上げるばかりだった。
雛森も、ルキアも、他の子供たちも、まるで時間が止まっているかのように動けない。
恵蓮は、わずかに首をめぐらせた。そして、戦いの続く邸内の気配に耳を澄ませる。
背後にある巨大なステンドグラスからの光が、亜麻色の髪や純白のドレスの上に赤や青、緑や金色の綾を作っている。それは、白熱していたその場を一気に鎮(しず)めるほどに、美しい光景だった。
ゆっくりと、その瞳が瞑目した。
「ごめんなさいね」
瞳を閉じたまま、天井を仰いだ。

「あ……」
思わず、その場の全員が息を飲んだ。

恵蓮の背後に、数メートルにも及ぶような乳白色の両翼が、突如として出現し羽ばたいたからだ。
半透明の翼の背後には、ステンドグラスの様々な色が透けている。羽が、細かに震えている。日番谷達には届かない風に、恵蓮の髪やドレスの裾が揺れた……
と思った瞬間、その場を満たしたのは、鈴を振るような美しい歌声だった。

「……この、歌声」
夏梨は、掠れた声で呟いた。間違いない。
――「誰か」
夏梨が初めてこの建物内に足を踏み入れたとき、呼んでいたその声と同じだ。

「……あっ？」
日番谷が、口元を押さえて屈みこむ。
「冬獅郎？」
斬月を投げ出した一護が、駆け寄る。
「……牙が、」
顔を上げた日番谷は、ぽかんとして自分の掌を見下ろした。
そこには、小さな二本の牙が取り残されていた。

「何なに？　どうしたの？」
雛森がきょとんと周囲を見回す。その小さな唇から見えていた牙が、跡形も無く消えていた。
「まさか、この歌声……」
日番谷が頭上の恵蓮を仰いだとき、その歌声が大きくなり、一気に

邸宅中に広がった。
それと同時に、周囲がまばゆいばかりの乳白色の光に包み込まれた。

がたん、と音を立てて開いた棺から、次々とバンパイアだった霊たちが姿を現した。
しかし、十一番隊にやられたはずの疵は全く無く、その口元に牙も無い。
普通の紳士や淑女の姿に戻った幽霊たちは、恵蓮に礼儀正しく頭を下げ、すうっと次々に天に舞い上がった。
カタカタ、と音をたて、壊れていた蜀台や、ヒビの入っていた机、くすんでいた窓が一気に修復され、まるで新品のような輝きを放ってゆく。
庭でドライフラワーのように枯れ果てていた薔薇が、突如鮮やかな赤を取戻す。庭に、春らしい新緑が広がってゆく。

「……これが、王族の力、なのか。信じられぬ……」
魔法のように、とでも言うのか。それとも人間のように「奇蹟的」と言い表すべきなのか。
ルキアは掠れた声で、そう呟くことしか出来なかった。
これではまるで、「創造主」ではないか。

唖然として見護るルキアの前で、恵蓮の体が、風にあおられるようにふわり、と浮いた。そのまま、重さが無いように少しずつ舞い上がる。その髪が、肩が、少しずつ透き通ってゆく。
「お……お待ちください！」
ルキアは、とっさに声をかけた。
「なぁに」

返された声は、麗しいとはいえ、どこか少女の甘さを残している。
「貴女を助けるために、王廷から刺客が差し向けられたと聞きましたが……」
「誰も来ませんわ」
恵蓮の答えは、寄せては返す波のように、すぐに返された。
「だって、いつものことですもの」
そのうっすらと桃色に色づいた頬に、かすかに笑窪が浮かんだ。

「……ちょっと、待ってくれ」
それを聞いていた日番谷が、こめかみを押さえた。
「まさか、これはすべて、『ワザと』か？」
驚きの余りか、敬語を使うという基本的なところまで、抜けてしまっている。
「もう少し愉しみたかったけど……しょうがありませんわね」
恵蓮は、こともなげにそれを「認める」と、夏梨を見下ろす。
その微笑みは、もう背後の景色がはっきりと分かるほど透けている。

「俺たちで遊ばないでくれ……」
もらされた日番谷の声は、その場に居合わせた、全ての死神たちのホンネだっただろう。
その言葉に、碧眼は一瞬、悪戯が見つかった子供のように煌いた。
そう思った時、優しい碧色の光が膨らみ、その場の全員が目を覆った。
再び眼を開けたときには、キラキラと光の残滓が残るのみ。

「ごめんなさいね」
繰り返されたその言葉に笑みが含まれていると思ったのは、気のせ

いだろうか。
進み出た日番谷の上に、碧の光が降り注ぐ。
「お詫びの代わりに、あなたにこれを。いつか、必要になる日がくるはずですわ」
天井に向けた日番谷の掌の上に、ひときわ濃い碧の光が、落ちた。
見下ろすと、そこには恵蓮の瞳の色そのままの碧の宝玉が、ステンドグラスからの光に明るく輝いていた。

Ｇｏｎｇ１７．　そして天使が舞い降りた（後書き）

「緋鹿恵蓮」は、この話での唯一のオリジナルキャラです。
原作にはこんなのいませんので、念のため＾＾；

後日談

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――

棺桶（かんおけ）：
症状：入ったら癒される。気持が弾む。
対処：どうしても耐えられなければ、入って良し。

血（ち）：
　症状：飲みたくなる。
　対処：我慢すべし。どうしても耐えられないなら、バンパイア同士でやってください。

大蒜（にんにく）：
　症状：立腹する。
対処：我慢してください。

バンパイアの皆さまからのお願い：
大蒜、聖水、十字架の類をちらつかせるのは止めてください。効果があるどころか、逆効果です。

卯ノ花烈　拝

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――

「……」
日番谷は仏頂面で、「バンパイアのしおり」と書かれたその紙を見下ろしていた。
眉間には、瀞霊廷が滅亡したかのような、深い、それは深い皺が寄っているｒ。
「まー・つー・もー・とー……」
怒りの源を睨み据え、バン！　と机を叩いた。
「いつまでも笑ってんじゃねえ！！」

「だ、だって」
乱菊は、笑いすぎて掠れた声で、やっとのことでそう言った。
「十二番隊から贈られてきたコレ、そうとう気がきいてると思いません？」
ぺしぺしと、隊首室の壁に立てかけられたソレの表面を叩いてみせる。
「ほぉ。確かに見事な棺桶だ。で？　どこが気がきいてると？」
「サイズ」
乱菊は即座に答えると、棺桶を指差した。その丈は、乱菊の肩くらいまでしかなく、通常の棺に比べて、明らかに小さい。
嫌がらせに思えるほど完璧に、１３３センチの身長にジャストフィットするように作られている。
「出て行け！！」
「は、はぁい！
その迫力に、思わず乱菊が隊首室から飛び出す。そして、最悪のタイミングで入れ替わりに入ってきたのは一角だった。

「……これは」
「すんません」

日番谷は、一角によって隊首机の上に置かれた、一枚の報告書に眼を落としていた。
――　おじいちゃん、ごめんね。　草じし　やちる。
「オイコラテメー」
「スンマセン！」
ひとつの単語のように読み上げた日番谷に、一角はひたすら頭を下げるばかり。

こいつ、意外と苦労人だな、と日番谷はそれを見て、怒りを押さえ込む。
ここで一角の首を絞めても、問題の解決にはならない。
今回任務を任されたのは十一番隊で、最も華々しく失敗したと思われるのも、十一番隊だ。
したがって、十一番隊が報告書を上げるのが、一番筋が通っている。
しかし。文字が書けるのかの疑いすらかかっている更木隊長と、あの草鹿やちる副隊長。
ゴメンネくらいが精一杯なのかもしれない。
日番谷は、それはそれは深いため息を落とした。

「たいちょー。機嫌直してくださいよー。甘納豆買ってきましたから」
そっ、と乱菊が隊首室の扉を開け、中をうかがう。
日番谷は一人で隊首席に腰掛け、ヒマそうに窓の外に視線を走らせていた。
入ってきた乱菊を見ると、机の上においてあった書類を乱菊に示してよこす。

「この報告書、総隊長に提出しといてくれ」
乱菊は、「吸血鬼の出現とその対処に関する報告書」と墨書きされたその紙に視線を落とし、ペラペラとめくって感嘆の声を上げた。
「いつもながら鮮やかですね～！」
「草鹿からの報告書なんて、出せるわけねーだろうが」
憮然としたままだが、日番谷の声はどこか覇気がない。ぼんやりしているようにも見て取れた。

「……一体、どういうことだったんです？　王族の姫を結局助けられなかったのに、死神にはお咎めもなし。刺客も結局、現れなかったんでしょ？」
あー、と日番谷は彼には珍しく、おざなりに返事をした。
「全部あの姫の、掌の上だったってことだろ」
「……。どういうことです？」
「技術開発局によると、確かに刺客とやらの気配は接近してた。でも、間に合わなかったそうだ。
それよりも先に、姫が目覚めて自分で帰ったからな」
「それならそうと、早く目覚めてくれればいいのに」
日番谷は、横目で乱菊を見やったまま、無言だった。
「なんです？」
「起きてたんだよ、初めから。初めに忍び込んだとき、夏梨が姫の声を聞いてたって後から聞いたんだ。間違いねぇ」
「はぁ？　狸寝入りってことですか？」
「面白かったんだろ。死神たちが、右往左往すんのが」
なるほど、日番谷の不機嫌の理由はこれか。乱菊は、茶箱を棚から出しながら、苦笑いする。

「でも、こういう見方も出来ますよ？　刺客があのタイミングで来

れば、死神だって無事ではすまない。絶妙なタイミングで、あたしたちを助けてくれたんだって」
「分からねぇな」
日番谷は、どこか拗ねたような口調で続けた。
「王族なんて、天上人の考えることなんて想像もつかねぇよ」
「まぁまぁ」
乱菊は、湯気の立った湯のみと、お茶請けの甘納豆の乗った盆を、隊首机の上に置いた。

日番谷はため息と共に薫り高い茶を飲み下す。
自分でも無意識のうちに、机の上においてあった碧の宝玉を手に取っていた。
あの時、恵蓮が去り際に残していったものだ。

「うわー、綺麗！　これあたしにくださいよ！」
肩越しに覗き込んだ乱菊が、それを見るなり歓声を上げた。
「こんなモンどうすんだよ？」
「女心が分かってませんねー。ジュエリーにするに決まってるじゃないですか」
ふぅん、と日番谷は口の中で声を漏らす。

「そういう使い方もあるか。ていうか、お前にはやらねぇぞ」
「なんですかー、どうせ上げるヒトなんていないくせに」
ぷぅ、と頬を膨らませた乱菊は、機嫌をとるように日番谷の肩を揉んだ。
「それともなんですか？　誰か、いるんですか？　あげたい女の子の一人や二人」

「アホか、そんなもん、いるわけ……」
言い返した日番谷だが、言いながら、ふと視線を宙に向ける。
「……そうか。そういう手もあるか」
「は？隊長、熱でもあるんですか？」
「うるせえよ」
振り返った日番谷を見て、乱菊は驚いた。

――　隊長が、微笑ってる？
ついさっきまで不貞腐れていたのに。
隊長にそんな顔をさせるのは誰なんですか。
乱菊がそう問いかける前に、
「散歩してくる」
短い一言を残し、日番谷は唐突に、フッとその姿をくらました。
すとん、と肩に乗せていた手が宙に落ちるまで気がつかないほどに、
それは見事な瞬歩だった。
「ちょ、ちょっと、隊長？？」
乱菊は窓から身を乗り出すが、そこには春の風が吹くばかり。

死神　対　バンパイア　　完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2626e/

死神　対　バンパイア

2010年10月9日17時13分発行